

ハイデガーと「シュテルンハイム作戦」

奥 谷 浩 一

要 旨

マルティン・ハイデガーが1933-34年の間、フライブルク大学の学長を務めたことはよく知られている。しかし、そのおよそ1年の間、彼は国民社会主義ドイツ労働者党、すなわちナチスの党员として、同大学のナチ化のために精力的に活動したことはあまり知られていなかったが、近年ヴィクトル・ファリアスとフーゴ・オットの研究によって、ハイデガーとナチスとの関係がこれまで考えられていた以上に密接で深刻であることが理解されるようになった。フライブルク大学学長ハイデガーは、その任期期間中にさまざまな諸事件にかかわっているが、そのなかで見逃すことができないのは、彼がいくつかの密告事件に関与したことである。そのうちのひとつが、世界的な化学者ヘルマン・シュタウディンガーにかんする密告事件である。この事件は、国家秘密警察、つまりゲシュタポによって「シュテルンハイム作戦」と名付けられた。この「シュテルンハイム作戦」は長い間歴史のなかに封印されてきたが、この封印を解いたのがオットの研究である。本論文では、このオットの研究と原典資料を踏まえながら、「シュテルンハイム作戦」、言い換えればシュタウディンガー事件の歴史的真相を明らかにするとともに、この密告事件を主導したハイデガーの思想と人格の暗部に迫ることにしたい。

キーワード：統制、指導者＝学長、七首伝説、毒ガス戦争、愛国心と民族にたいする忠誠

目 次

はじめに

第1章 「シュテルンハイム作戦」またはシュタウディンガー事件の発端

第2章 化学者シュタウディンガーの経歴と業績

第3章 第一次世界大戦前後とフライブルク大学招聘にさいして生じた諸事件

(1) 平和主義者・人道主義者としてのシュタウディンガー

(2) シュタウディンガーとハーバーとの論争

(3) シュタウディンガーのフライブルク大学招聘にさいして生じた事件

第4章 「シュテルンハイム作戦」の顛末

第5章 「シュテルンハイム作戦」後の諸事件

第6章 その後のシュタウディンガーとハイデガー

第7章 主題の考察

はじめに

世界的な名声をもつ哲学者ハイデガーが、1933年4月21日にフライブルク大学学長に選出された直後にナチ（国民社会主義ドイツ労働者党）に入党し、それからおよそ1年間学長を務めた後、翌年の4月に学長職を辞任したことはよく知られている。ハイデガーとナチズムとの関係は、ヴィクトル・ファリアスとフーゴ・オットの研究が世に出るまでは、一時的・偶然的なものだと考えられてきたが、これらの研究は、ナチズムにたいするハイデガーの関与がこれまで考えられていたよりもはるかに密接なものであり、ハイデガー自身のナチズムがきわめて深刻な問題であることをはっきりと示した。このことは、当然のことながら、ハイデガー哲学の理解と解釈にも深刻な問題を投げかけ、またこうした観点からハイデガーの哲学思想にたいして全面的な再評価を行うという作業を提起することになった。その後、世界的な名声をもつ哲学者ハイデガーが何ゆえに20世紀最大の蛮行を行ったナチズムと本質的な関係をもちえたのかという問題をめぐって、とくに欧米においてハイデガー・ナチズム論争が広汎に展開されるにいたったが、この論争はいっこうに収束する気配を見せておらず、反対にこれからもますます熱い論争の主題となり続けるであろう。

ハイデガーは、1年間の学長職の間、ナチから求められたフライブルク大学の Gleichschaltung, すなわち「統制化」（または「同質化」）という使命に応じて、全国の公務員職から非アーリア系人種と公務員としてふさわしくない者を追放することを意図して1933年4月に施行された「公務員職再建法」の特に第4条を大学内で特に厳格に適用したほか、大学のナチ化とナチ系大学人の連携のために精力的に活動した。さらにハイデガーは、学長となってから半年後には指導者=学長に任命されたが、大ざっぱな言い方をすれば、このことは同大学においてハイデガーが Führer（つまり「総統=指導者」）としての役割を担うことになったことを意味する。ハイデガーは指導者=学長として、大学教官全員集会を解散し、学部と評議会の自治権を剥奪したばかりか、事務局長と学部長の任命権さえも自らに集中させるというように、大学内のナチ化・ファッショ化を推進した。結局のところ、こうしたラディカルさゆえにハイデガーは、大学内の反感を買って孤立し、やがて挫折して学長職を投げ出すことになったのである⁽¹⁾。

ハイデガーは自らの学長在任期間中にさまざまな諸事件に関わっているが、これらの事件のなかでとくに見逃すことができないのは、ハイデガーがいくつかの密告事件に関与したということである。これらは、彼がたんにナチの強い信奉者でありまたアクティヴな活動家であったことに起因するだけではなく、おそらくはハイデガー自身の人格の内奥に存在したある種の暗部に由来するであろうと考えられるものであって、このことは同時にハイデガーの哲学者としての責任と資格にも疑義を抱かせるのに十分である。

例えばハイデガーは、マックス・ウェーバーの甥であるエドゥアルト・バウムガルテンがナチに入党しようとしたさいに、ゲッティンゲンの「ナチ大学教師連盟」に宛てて自らの所見を

送り、バウムガルテンがヤスパースを含む「自由主義的・民主主義的なハイデルベルク知識人サークル」にぞくし、またフライブルク大学の古典文献学の正教授でユダヤ人のエドゥアルト・フレンケルと密接に連絡を取っていたことを告発した。1933年12月末のことである。この密告事件（バウムガルテン事件）のために、バウムガルテンには学者としての人生を切り開く道が閉ざされたという。このことは、ウェーバー夫人のマリアンネをつうじてヤスパースにこの所見の写しが伝えられたことでヤスパースの知るところとなり、自分と仲間たちにたいする裏切りのゆえに、ヤスパースが長年の友人でもありライバルでもあったハイデガーの評価を決定的に変えるきっかけとなったものである。

さらに最近になって、学長ハイデガーがさらにいっそう重大な密告事件にかかわっていたことが知られるようになった。それは、ハイデガーが1933年9月末、戦後になってノーベル化学賞を受賞したほどの優れた化学者であり平和主義者でもあったフライブルク大学の同僚ヘルマン・シュタウディングガーを、たんなる噂をもとにナチ高等教育審議官に密告したために、フライブルク警察がシュタウディングガーを告発し、あの悪名高い秘密国家警察（ゲシュタポ）が極秘に捜査を進めたという事件である。ハイデガーはドイツ敗戦後になって、ナチに加担した罪を問われて大学の「政治的浄化委員会」によって査問を受けたのだが、もしもこの時にこの事件がこの委員会のメンバーに知られていたとすれば、ハイデガーの大学への復帰は決してありえなかったであろうし、彼にたいする処分もきわめて厳しいものになっていたであろう。この事件はそうのように推測されるほど重大な政治的意味をもつものであった。

フライブルク大学学長ハイデガーはこの事件においても、たんに偶発的・付随的ではなくて、あらかじめ調査と準備を行ったうえで、自らの明確な意図と計画にもとづいてシュタウディングガーを密告しており、記録文書から見れば、ハイデガー自身がこの事件を首謀し、また主導したことは疑う余地がありえない。したがって、ハイデガー自身が、しかも大学学長として、いささかも罪のない一人の同僚の化学者を長期にわたって苦しめるという、ナチの権力犯罪に加担したことは明らかである。ハイデガーの、大学学長および哲学者としてばかりか、一人の人間としての罪と責任は、このうえなく重大であると言わなければならない。

本論文では、この事件を一般的に「シュタウディングガー事件」と呼ぶことにするが、しかしこの事件は国家秘密警察によって「シュテルンハイム作戦」と名付けられたので、ナチ側の視点からこの事件を見た場合に、特に後者の呼び名を用いることにしたい。私はすでに、私の論文「ハイデガー『事実と思想』の真実と虚構—ハイデガーの『弁明』再論—」⁽¹⁾のなかで、ハイデガーがその学長時代にいくつかの密告事件に関与していることを論じて、この事件についても概略的に言及しており、さらに論文「ハイデガーとシュタウディングガー事件」⁽²⁾においてもさらに詳しくこの事件を論じている。しかし、その後さらに新しい原典資料を入手することができたので、これらの資料をもとに、本論文において改めてこのテーマを取り上げて考察の対象としたい。

第1章 「シュテルンハイム作戦」またはシュタウディンガー事件の発端

「シュテルンハイム作戦」またはシュタウディンガー事件は、ナチ内部の陰湿な政治的密告事件であったために、一般にはまったく知られることなく、50年もの長きにわたって封印されてきた事件である。最初にこの歴史の封印を解いたのは、フライブルク在住の歴史学者フーゴ・オットである。オットは、カールスルーエの記録保管所において、フライブルク大学学長ハイデガーがシュタウディンガーを政治告発した事件にかんする一連の資料を発見し、1984年12月6日の『バーデン新聞』に詳細な解説を付して、これを公表した。これによってシュテルンハイム作戦またはシュタウディンガー事件が初めて陽の目を見ることになったのである。

オットによれば、この事件の概要はこうである。

ナチスが権力を掌握してドイツ全国に統制化という名の全体主義化が急速に進行するさなかの1933年9月29日、すでにナチによって支配されていたバーデン州文部省の高等教育審議官オイゲン・フェーアレがフライブルク大学を訪問した。それは、10月1日付でフライブルク大学学長ハイデガーを「指導者－学長」に任命するためであった。「指導者－学長」とはたんなる学長ではなくて、文部大臣と法務大臣から正式に大学の指導者として任命され、ヒトラー体制下で大学を指導する学長であった。それは、ヒトラー体制下にふさわしく、それまで大学に存在した大学教官全員集会を解散し、評議会および学部の自治と議決権を剥奪し、学部長と事務局長の任命権・解任権をも学長の権限のもとに集中するという、徹底的に非民主的で独裁的な学長であった。

学長ハイデガーは、フェーアレと会談したさいに、当時すでに世界的に有名な化学者であり平和主義者でもあったフライブルク大学の同僚ヘルマン・シュタウディンガー教授にかんして、かなり問題のある情報をフェーアレに提供した。これを受けてフェーアレは、1933年4月に成立したあの悪名高いすなわちユダヤ人だけではなくて、政治的な態度から見て愛国心に欠けるなど好ましくない人々を公務員から排除しようとした条項との関連で、シュタウディンガーを愛国心に欠ける好ましくない人物と見なし、ハイデガー学長にたいしてシュタウディンガーにかんする調査を開始するようにとの指令を出すとともに、早くも翌日にはフライブルク警察にシュタウディンガーを告訴する手続きを取った。これによってただちにカールスルーエの秘密国家警察（ゲシュタポ）がシュタウディンガーにた



写真1. フライブルク大学学長時代の
ハイデガー

いする搜索を開始するところとなった。シュタウディングーにたいする秘密国家警察のこの搜索は、シュタウディングー Staudinger という名前を、その頭文字である St. を共通にもつシュテルンハイム Sternheim という暗号名に読み替えて、つまり秘密裡に、行われることになった⁽³⁾。したがって、この事件はゲシュタポによって「シュテルンハイム作戦」として極秘に展開されたのである。

ハイデガーは、高等教育審議官フェーアレにたいして、理由なしにシュタウディングーにかんする情報を提供したわけではない。オットの調査によれば、これに先立つ1933年7月、学長ハイデガーは、自らの腹心である物理学者で当時フライブルク大学私講師アルフォンス・ビュールをスイスのチューリヒに派遣し、チューリヒ工科大学時代のシュタウディングーを調査するようにと命じていた。アルフォンス・ビュールは、著名な物理学者でありハイデルベルク大学教授のフィリップ・レーナルト⁽⁴⁾のもとで学位を取得したあと、フライブルク大学で教授資格を取得し、チューリヒ工科大学物理学研究所の助手を務めた後、フライブルク大学に戻ったという経歴の持ち主である。周知のようにレーナルトは、ヨハネス・シュタルクと並んで、ノーベル物理学賞受賞者でありながら早くから熱狂的なナチ信奉者・極端な反ユダヤ主義者でもあり、あの悪名高い「ドイツ的物理学」を標榜した人物である。またビュールは、第一次世界大戦に参戦し、ベルリンでローザ・ルクセンブルクとカール・リープクネヒトを指導者とするスパルタクス団との戦闘に参加したばかりか、フライブルクのナチ大学教官サークルの中心人物でもあり、ハイデガーを学長職に押し上げるのに大きな功績があった。したがって、ビュールはフライブルクの大学関係者のうちでもっとも戦闘的で筋金入りのナチの一人であったといえる。ハイデガーはそのような人物を自らの腹心とし、自らが主導した密告事件に利用したのである。ビュールがチューリヒのドイツ総領事館の官員から聞き出したところよれば、シュタウディングーにかんする資料がカールスルーエのバーデン州役場にあることが判明した⁽⁵⁾。後に述べるように、ハイデガーはおそらくビュールが報告したこれらの資料を検討しながら、シュタウディングーが「有罪」であることを確信し、「公務員職再建法」第四条を彼に適用して「免職処分」とするよう、当局に進言している。

オットが突き止めたこれらの事実、彼が外務省政治文書課で綿密な調査を行った結果にもとづくものであって、その正当性は疑うことができない。ところで、ハイデガーはなぜ自らシュタウディングーにかんする調査と情報収集に乗り出したのであろうか。

シュタウディングーは、1912年以来チューリヒ工科大学の化学の教授を務めていたが、1925年になってフライブルク大学に招聘されることになった。しかし、すでにゴム、セルロース、デンプン、タンパク質などが化学結合によって原子どうしが結びついた高分子であるといういわゆる高分子説を唱えて世界的にも著名な有機化学者となっていたシュタウディングーがすんなりとフライブルク大学に転じることができたわけではなかった。彼はもともと平和主義的な信念の持ち主であり、彼の招聘にあたってはその彼の第一次世界大戦中とその直後の言動が民

族主義・愛国主義的な思想をいだいていたフライブルク大学の教授たちによって問題とされ、彼のドイツ国民としての資格が疑われたのである。当時シュタウディングーは、戦争と民族主義的な運動に反対する論文を発表し、ドイツの戦争を軍事的に支援することはしないと公言したばかりか、ドイツ人でありながらスイスの国籍を取得しようとしたし、平和主義の立場に立って1917年に軍旗にたいする忠誠を拒否した同僚の医学博士ゲオルク・フリードリヒ・ニコライを支援さえしたからである。そのために、シュタウディングーは自らの招聘にさいして、当時と比べていささか変化した自らの現在の立場と信念とを明らかにする書類を提出して、こうした疑いはらす努力をしなければならなかった。

その結果、彼のこうした努力は成功し、彼は翌1926年にフライブルク大学へと無事に転出することができた。当時ハイデガーはまだマールブルク大学に在職中で、フライブルク大学へ招聘されたのは1930年になってからである。したがってハイデガーは、シュタウディングーの招聘にさいして生じたこの問題には直接にかかわってはいないが、彼とこの問題についての噂ははっきりと耳にしていたことであろう。しかしわれわれは、それにしてもハイデガーが、いったんは問題にされながらも上記のかたちで決着がつけられたこの事件を、いったいなぜ7年後の学長在職中に再び蒸し返し、しかも密告の根拠とすることができたのか、大いに疑問とせざるをえない。シュタウディングーを標的とする「シュテルンハイム作戦」は、決して偶然の産物でも非意図的に浮上してきたものでもなくて、学長ハイデガー自身によって意図的に仕組まれ、彼の綿密な調査と計画のもとに主導・実行された事件にほかならないことは明らかだからである。

すでに述べたように、ナチス政権奪取後の1933年4月に公布されて以来、その第4条を根拠としてユダヤ系の人々が公務員と教職から追放されただけではなくて、ナチやその民族主義的・人種的路線に対して批判的またはこれに同調しなかったり、あるいはマルクス主義政党に加担・協調したりしたアーリア系の人々もまた彼らの過去にまでさかのぼって調べられたうえで免職または追放されたのであるが、そのさいに用いられた手段が密告という陰湿なやり方であった。こうした統制化には期限が切られていた。密告を含む何らかの手段によって当局に訴えられた人物にかんして当局が決定を下して警察に告発するのは同年9月末日までであり、文部省や国務省がこの人物にたいして「公務員職再建法」第4条を適用するかどうかを最終決定するのは翌1934年3月末日となっていた。フライブルク大学学長ハイデガーは、まさしくこうした限られた政治状況のなかで、世界的な化学者としてすでに名声を得ていた同僚シュタウディングーを密告し、彼を免職に追い込もうとする「シュテルンハイム」作戦の主導者として、その先頭に立ったのである。

第2章 シュタウディンガーの経歴と業績について

ヘルマン・シュタウディンガーは1881年に、フランツ・シュタウディンガー（1849—1921）を父として、ヘッセン州ヴォルムスに生まれた。彼の父のフランツは、ヴォルムスとダルムシュタットのギムナジウムの哲学教授を務め、新カント派にぞくして、カントの倫理学を社会主義と結合しようと努力したほか、消費組合運動を理論的に基礎づけただけでなく、これを実践的に指導したことでも知られている。ギムナジウム時代のヘルマンは当初植物学に関心を示したが、植物を研究するためには化学をきわめることが必要であることを痛感し、ハレ、ミュンヘン、ダルムシュタットの各大学では化学を専攻した。1903年にハレ大学で学位を取得すると同時にシュトラスブルク大学助手となったのを皮切りに、1908年にカールスルーエ工科大学員外教授、1912年にチューリヒ工科大学教授となり、すでに述べたように著名な化学者ハインリヒ・ヴィーラントの後任として1926年にフライブルク大学教授に招聘され、さらに1940年にはフラ



写真2. ヘルマンとマグダのシュタウディンガー夫妻

イブルク大学高分子化学研究所長となる。

この間、ヘルマン・シュタウディンガーは、弱冠24歳でジフェニルケテンや合成ゴムの原料であるイソプレンの合成方法を発見したり、ポリオキシメチレンを作製するなどの多くの業績をあげたが、フライブルクに転出してからはもっぱら高分子研究に専念するようになる。とりわけ彼の世界的な業績として知られているのは、ゴム、セルロース、デンプン、タンパク質などの化合物が、それまで考えられていたように、小さい分子の大きな集合体なのではなくて、一般の化学結合と同様に原子どうしが結びついた、鎖状になった数万から数十万以上もの分子量をもつ高分子であることを、しかも粘度測定などの新しい方法によって証明したことである。彼はこれらの研究から、高分子物質の溶液の濃度および粘度とその物質の分子量との間に関係式があることを発見したが、これは「シュタウディンガーの粘度式」として知られている。これらの一連の高分子研究が評価されて、彼は第二次世界大戦後の1953年にノーベル化学賞を受賞するという名誉に輝いた。彼は文字どおり、高分子または巨大分子化学のパイオニアであり、その「生みの父」にほかならない。

彼は日本人研究者にも大きな影響を与えており、第二次世界大戦後の1957年に我が国に夫人同伴で来日した。その折り、昭和天皇から高分子の存在とその探究方法にかんする質問を受けて、感銘を受けている⁽⁶⁾。こうして数々の世界的な業績を残した高分子化学のこの「巨人」は1965年に84歳で亡くなった⁽⁷⁾。彼の著書のうち日本語に翻訳されたものが2点ある。それは『有機膠質化学』（寺岡甲子郎訳）東洋書館 [1946年] と『研究回顧－高分子化学への道』（小林義郎訳）岩波書店 [1966年] である。しかし、これらの著作を参照するかぎり、ナチスの時代に彼の身にふりかかった悪夢のような事件を示唆するものは何も含まれてはいない。

シュタウディンガーのこうした経歴と業績を回顧するかぎり、彼の生涯は研究一筋の平穏な生活であったように見えるが、しかし実際には波乱に満ちたものでもあった。それというのも、すでに述べたように、彼は第一次世界大戦、ナチス・ドイツの勃興、第二次世界大戦という社会情勢の激動的な変化とかかわって、何度かにわたってきわめて深刻な政治的事件に巻き込まれたからである。

第3章 第一次世界大戦前後とフライブルク大学招聘にさいして生じた諸事件

(1) 平和主義者・人道主義者としてのシュタウディンガー

最初の出来事は、シュタウディンガーがチューリヒ工科大学に在職していた時代の1917年に起きた。オットによる記録文書の調査を総合すれば、ドイツ国籍をもっていたシュタウディンガーはこの年、ドイツ国籍をそのままにしてスイスの国籍を取得しようとして、当地のドイツ総領事館に申請したが、この申請は却下された。彼は1904年に兵役不適格者として長期に兵役

を免除されていたけれども、1915年に徴兵可能性について審査されることになっていた。平和主義者であった彼は、武力による戦争に反対する信念から、徴兵のための招集命令を逃れようとして、二重国籍を取得しようとしたと考えられる。この申請が却下されたわけは、シュタウディンガーは、反軍事的な信念の持ち主であって、第一次世界大戦に祖国ドイツが参戦していたにもかかわらず祖国のために必要な武器や労働奉仕によってこれを支援するという気持ちがなく、しかもそのことを公言したばかりか、ドイツの民族運動に反対する信念を隠そうとはしなかったからである。彼には愛国心が欠如し、民族的な信念にかんする十分な保証が存在しないと判断されたのである。しかし、とりわけ重大であったのは、彼とドイツ総領事館とのこうしたやりとりのなかで、彼が軍事的に重要な化学物質、とりわけ染料の製造とその工程にかんして重要な機密情報を敵国側に流したという噂が流れて、その明確な根拠がないにもかかわらず、問題とされたことである。

たしかにシュタウディンガーは、1917年に『平和の監視所』という雑誌に論文「技術と戦争」を書いて、そのなかで石炭の需要、人口とエネルギー成長、水力発電、鉄鉱石と粗鋼などにかんしてドイツ、フランス、イギリス、アメリカ合衆国などの国別に表示した図表を用いながら、現在の戦争がこれまでの戦争とは大きく異なって圧倒的に大きい破壊力をもっており、予想もつかない大量殺人と破壊をもたらす可能性があることを論じながら、技術の優秀さとエネルギー資源をどれだけ開発して手に入れるかが軍事的な勝敗の分かれ目になると述べている。例えば彼はこう書いている。「これまで地球の内部に石炭というかたちで眠っている過去の地質的時代の太陽エネルギーは、新しい生活のためにわれわれの時代を呼び覚ますことを理解した。そのエネルギーが数世紀のうちにわれわれの驚くべき文明をもたらしたように、今こうした力が戦争において見極めがたい働きとまだ決して存在していない破壊にたいして効果を及ぼしている。」⁽⁸⁾

シュタウディンガーが掲げたこれらの図表を見るかぎり、アメリカ合衆国の天然資源と鉄を初めとする鉱工業の水準の高さは、ドイツのそれを凌駕していることが一目瞭然である。したがって、シュタウディンガーによれば、今次の戦争に参戦したアメリカ合衆国がその技術的な力のすべてを戦争奉仕に投入するなら、これと同盟した連合国側の技術的優位は疑いもなく強力なものとなり、ドイツの敗北は避けられないであろうと予測する。「優れた技術が現代の戦争にとって重大な意義をもつはずだとすれば、アメリカ合衆国が完全な『軍事化』を行うならば、これに応じてドイツにとって勝利のチャンスはわずかもとなろう。」⁽⁹⁾だから、ドイツが没落を免れようとするれば、たんにロシアと一時的に休戦するという分離的・部分的平和ではなくて、真に永続的な平和が人類の課題とならなくてはならない。シュタウディンガーはさらにこう述べている。「将来の戦争は予想しえない破壊と破滅をもたらすことがありうる。そうなるとこうした状況にあっては、真に持続的な平和にかんする問いが全人類の課題として現れる。この課題は、もしも文明諸国民が没落によって脅かされてはならないとすれば、今日、そ

してまさしく今日、解決されなければならない。一種の休戦をもたらすにすぎないような平和というものは、ヨーロッパが会うことができる最悪のものであろう。」⁽¹⁰⁾ こうした叙述が明確に示しているように、この時期のシュタウディングガーは確かに筋金入りの平和主義者だったのである。しかもシュタウディングガーは自らの論文のなかでこうした主張を展開しただけにはとどまらず、スイスにあったドイツ政府代表者に自らの主張を通達しさえしたのである。

ところで、シュタウディングガーのこうした良心的兵役拒否と平和主義の姿勢は、オットが指摘するように、レオンハルト・ラーガツ牧師を中心とする平和主義的で社会主義的な宗教集団ともかかわっており、またこの集団に関係したシュタウディングガーの当時の妻ドーラともかかわっていた。

レオンハルト・ラーガツ Leonhard Ragaz (1868-1945) はスイスのプロテスタント神学者である。バーゼル、イェーナ、ベルリンの各大学で神学を勉強した後、牧師となった。フーアのギムナジウムで教鞭を取ったりした後、公益にかかわる分野で活動するようになり、貧民救済、アルコール中毒、精神薄弱児童などに対処するための社会活動を展開しながら、次第に社会主義思想へと接近する。1902年にバーゼルのミュンスターの牧師となり、資本主義、帝国主義、軍国主義、ボルシェヴィズムなどに反対するとともに、独自の宗教的・平和主義的社会主義の思想を確立していき、スイスの宗教的社会主義の運動の創設者にして指導者となる。1908年にはチューリヒ大学の体系的な神学および実践神学の教授として招聘される。第一次世界大戦が勃発すると、ラーガツはこれに大きな衝撃を受けて、非暴力と戦争根絶という原理を掲げて、兵役拒否と反軍国主義と平和主義の運動を展開した。こうした活動の積み重ねの結果、彼は1921年にはチューリヒの教授を辞さなければならなかった。彼は「私の精神的発展」と題する小論のなかでこう述べている。「私が1921年に教授を辞したのは、私の発展全体の成熟した果実であった。私は個人的には教会を抜け出でなければならなかったし、国家、教会、社会の束縛を離れて『自由な空気のなかで』キリストに奉仕しなければならなかった。」⁽¹²⁾ 彼は晩年には、第一次世界大戦をはるかに上回る惨劇となった第二次世界大戦を体験しなければならず、その結末を見届けるかのように、1945年12月にチューリッで没している。彼の代表的な著作には、『福音主義と現代の社会的闘争』(1906年)、『神の国の使命』(1942年) などがある⁽¹³⁾。

シュタウディングガーのチューリヒ時代は1912年から1926年までの14年間に及ぶが、この間とくにシュタウディングガーの当時の妻ドーラがこのラーガツ牧師の宗教的社会主義的運動に関与していた。ラーガツが指導する宗教的社会主義の運動は、1917年に会議を開いて新しい組織化を行い、スイス(ロマンス語地域)、北スイス、グラウビュントナーの三つの地域からなる指導部を選出したが、ドーラはそのうちの北スイス委員会の構成メンバーであった⁽¹⁴⁾。またドーラは同じ活動仲間としてラーガツの妻クララと親しい間柄にあり、ヘルマンは妻ドーラをつうじてラーガツとの付き合いがあった。ヘルマン・シュタウティンガーもまた、ラーガツのために友人を紹介したり、講話を行ったり、出版社を斡旋したりなど、この宗教的社会主義的活動

を側面から支援していた。ラーガツの日記を見れば、シュタウディングー夫妻はしばしばラーガツ宅を訪れて、さまざまな話題について意見を交換したり、運動にかんする相談をしていたことがわかる⁽¹⁵⁾。

こうした運動とのかかわりのほかにも、シュタウディングーは愛国的・好戦的なドイツ人から見れば問題とされるような出来事に関与している。これもオットが指摘していることだが、シュタウディングーは、自らの同僚で医学博士のゲオルク・フリードリヒ・ニコライ教授が平和主義者として大戦中に軍旗にたいする忠誠への誓いを拒否したことで罪に問われたさいに、彼を支援して嘆願書を書くなどの行動をとった⁽¹⁶⁾。これも1917年のことである。シュタウディングーは先に言及した論文「技術と戦争」の脚注のなかで、ニコライの著書『戦争の生物学』を紹介し、ニコライが自分と同じ成果に到達していると述べている。このことは、シュタウディングーとニコライとが共同で研究した仲間どうしであったことを裏付けるものである⁽¹⁷⁾。ニコライにたいするシュタウディングーのこうした支援行動にかんしても、後にゲシュタポが嗅ぎ付けるところとなった。

ところで、シュタウディングーは、第一次世界大戦終了後の1919年にも、前回と同じように二重にスイス国籍を取得しようとして、そのための申請を行っている。この帰化の申請にたいしては1920年1月にスイス政府から許可が下りたが、ドイツからは承認されなかった。その時も、ドイツ総領事館からベルリンの本局には「シュタウディングー教授が、その大学教授という立場を考えると、戦時においてとりわけ諸外国でのドイツの評判を損なう結果となる態度を取っていた」⁽¹⁸⁾という査定文書が送られた。この文書についてもオットが確認している。

シュタウディングーのこうした言動は時期が悪すぎた。彼が、第一次世界大戦の終末期に、しかもドイツが敗北に直面しているこの危機的な時期に、武力を用いた戦争を否定しただけではなくて、ドイツの敗北をも予見した論文を公表したことは、たとえその予見が正しいことがその後の戦争の経過によって実証されたにしても、愛国主義的なドイツの人々を憤激させたに違いない。そして、この同じ時期に、兵役を免れようとしてスイス国籍を取得しようとしたことも、彼がドイツ国内で敗北主義者というレッテルを貼られる理由のひとつとなった。シュタウディングーのこうした言動は、七首（あいくち）伝説、つまり、第一次世界大戦におけるドイツの敗北は、最前線で生死を賭けて連合軍と戦っているドイツ兵にたいして、ドイツ国内からストライキや反戦または革命運動が背後からいわば七首を突きつけるようにして裏切りを行ったことによって生じたのだとする狂信的な考え方によって、その後大きな問題とされて、彼の人生に長く、そして強く影を落とすことになったのである。

しかし、こうした平和主義的な言動によって非難と迫害を受けたのはヘルマン・シュタウディングー本人だけにとどまらなかった。ヘルマンの証言によれば、彼の兄弟で当時ベルリンのプロイセン本省の次官を務めていたハンス・シュタウディングーは、ヘルマンのスイス国籍取得の少し前にその職務を剥奪されたという。迫害は肉親にも及んだのである⁽¹⁹⁾。

(2) シュタウディングーとハーバーとの論争

第二の出来事は、シュタウディングーが第一次大戦後のヴェルサイユ協定交渉の時期の1919年に『赤十字インターナショナル・レビュー』という雑誌にフランス語の論文「現代技術と戦争」を公表し、これを彼の年長の友人で高名な化学者であるフリッツ・ハーバー Fritz Haber (1868-1934) に送ったことに端を発している。

周知のように、当初電気化学を専攻したハーバーは、1894年にカールスルーエ工科大学の助手となり、1906年に同大学教授に昇格している。そして、1911年に新設されたベルリンのカイザー・ヴィルヘルム協会研究所の物理化学・電気化学研究所長として招聘され、同時にベルリン大学教授を兼任した。この間ハーバーは、電気化学の分野では、二枚のガラス板を用いてその間の電位を測定することで溶液の酸性度を決定する「ガラス電極」を発明しただけでなく、化学肥料の原料として窒素と水素からアンモニアを固定する方法の研究に従事し、1908年に実験室で始めてアンモニア合成に成功した。これがアンモニア合成の「ハーバー法」である。彼はその後もアンモニア合成の工業化の研究を続けて1913年にこれに成功する。ハーバーによる窒素の固定は、第一次世界大戦においてはドイツの大きな戦力となった。アンモニアを酸化することで硝酸が得られ、この硝酸が火薬の原料となったからである。ハーバーはアンモニア合成の功績によって1918年にノーベル化学賞を受賞した。

ハーバーの研究歴のなかで見逃すことができないのは、第一次世界大戦中に彼が毒ガスの製造計画にかかわっただけでなく、実際に塩素ガスによる連合軍攻撃を指導したことである。ハーバーは愛国心に富んでいて、祖国ドイツのためにこうした新しい危険な兵器の製造と使用にかかわったのである。すでに述べたように、シュタウディングーは1908年にカールスルーエ工科大学の員外教授となっているから、ハーバーとは3年の間同じ大学の同僚であり、また同じ優れた化学者どうしとして親しい友人関係にあった。しかし、こうした経歴の持ち主であり、戦争にかんしてシュタウディングーとは正反対の立場にあったハーバーは、シュタウディングーから送られた論文「現代技術と戦争」に憤激して彼と手紙で論争することになり、そしてこの二人の優れた化学者どうしの友人関係が断絶することとなったのである。

シュタウディングーによって1919年にフランス語で書かれたこの論文は、その前年の1918年の初めに赤十字国際委員会が第一次世界大戦で交戦中の国々にたいして発表した声明文を引用することで開始されている。それは次のようなアピールであった。「航空学、弾道学、または化学における科学の進歩は、そのことで苦痛をひどくし、いたるところで住民全体に苦痛を広げたので、戦争はやがて全面的な、しかも情け容赦のない破壊行為以外のものではなくなるであろう。」「われわれは今日野蛮な革新に反対する声を高めよう。その野蛮な革新とは、科学が完成しようと目指しているもの、すなわち、いつも殺人を行えば行うほどますます洗練された残忍さで目指しているものである。問題なのは窒息性で有害なガスの使用であって、その使用

は、見たところ、これまで疑う余地のない規模で増大し続けている。」⁽²⁰⁾

シュタウディングーは、このアピール文を支持するとともに、化学の専門家の立場からこれをさらに補強しようとして、自分の論旨を展開している。彼の論旨を要約すれば、次のとおりである。

このアピール文は、争いの場において恐るべき究極的な破壊の手段を用いるのではなくて、国家どうしのエゴイズムのうえに人間性の規範と人類にたいする配慮を置くことを切望したものであるが、さっぱり反響を生まなかった。しかし、人類の未来を考えると、このアピール文が持つ射程はかつてないほど重要な意義をもつ。最近の50年間の化学技術の発達、大地に蓄積された測り知れない力をきわめて大規模に利用することで、人類に根本的に革命をもたらした。例えば最近の半世紀がそうである。しかし、それと同時に、石炭の生産量は10倍を超え、土地の生産高もおよそ2倍となった。比較的最近になって始まった鉄、石油、重油などの生産と利用も同じく飛躍的な展開を示している。しかし、それは同時に、天然の硝石を用いるのではなくて空中窒素の固定による硝石の製造によって、綿火薬、ダイナマイト、ピクリン酸などといった、石炭の副産物をも利用した新しい火薬の大量かつ安価な製造を可能にした。それだけではない。それは、例えばホスゲンやマスタードガスというような毒物または毒ガスの安価で大量の生産をも可能にし、そのことによって戦争において大量の破壊と殺人を行う無限の可能性が開かれた。しかし、爆薬を生産するために役立つ物質が、化学肥料というかたちで土地を生産的にすることができる物質と同一であるという事実は、戦争の継続は人類を直接に破壊するだけでなく、肥料の不足とこれに伴う土地・食料生産の減少による飢餓というかたちで間接的に人類に影響を与えることになる。

このように述べた後で、シュタウディングーはさらにこう続けている。「われわれのために取っておかれた未来は、われわれにとっては最も陰鬱な時代という外観を呈している。炭鉱と鉄鉱の所有は、民衆の産業的発展のためにと同様に、強力な軍備の準備のためにも第一の重要性をもつから、生活維持に必要なそれらの基本要素のために、これからは再び活発な新しい争いが生み出される。ヨーロッパにおけるこのような戦争は容易に死に至る争いとなる。というのは、もしも現在の戦争の間に蓄積された技術的経験がすべて、そしてもしもつばら戦争の最後の局面でことごとく適用されたとすれば、それらはすでに新しい戦争の準備に役立っているのだが、もしも学者たちと技術者たちが新しい有毒ガスと新しい爆薬の生産のための研究を続けるならば、未来の戦争の激しさと恐ろしさは考えにくい、さもなければ考えることが困難である。破壊の手段は今日、これからはいかなる国もそれを用いて防御のために有効に用いることができないような、性格の強さを身にまとったのである。いたるところで死と絶滅の種をまくためには、それらを適用すればこと足りるであろう。」⁽²¹⁾

シュタウディングーによれば、人類が新しい火薬や有毒ガスという大量殺戮の兵器を手にした以上、交戦国がこれらを用いて互いに殺し合うことによって共倒れする可能性が生ずるから、

こうした兵器から軍事的な防衛を企てること自体が意味を失うことになる。それでは、今の段階で何が必要なのかと言えば、こうした非人道的兵器を用いずに、平和的な関係を築こうとする道義的な精神である。彼はこう述べている。「今日危うくしそこなうもの、古くからの文明を全体的な没落から救うことができるもの、それはもっぱら道徳的な目覚めであって、これこそが人々と新しい基礎との関係を打ち立てるであろう。この条件によって、技術はわれわれの世界の文明化された人々のための繁栄の未来を準備する力と手段とをもつであろう。科学的な技術は大きな責任を引き起こす征服なのである。それは、われわれを最終的な激変へといたらしめることができる。それは、反対に、救済の思いもよらぬ道をわれわれに開くこともできるのである」⁽²²⁾。

こうしてシュタウディングーは次の言葉をこの論文の締めくくりとしている。「戦争、毒物、公衆衛生の間の直接の関係がはっきりしているのだから、次のことは可能ではなかろうか。それは赤十字が、有毒なガスの使用の危険を新たに思い起こさせ、それで何らかの措置が新しい破局、つまりその結果はきわめて恐ろしいものであるのだが、そうした破局から人類を救うのを助ける手段を見つけ出すことである。」⁽²³⁾ 第一次世界大戦を上回る惨劇となった第二次世界大戦のなかで原子爆弾の投下による一般民衆の大量殺戮を経験した現在のわれわれが、この新しい火薬や毒ガスという言葉をさらに進んだ核兵器という言葉に置き換えて考えて見るならば、人類の未来という大局的な観点からこうした大量破壊兵器の使用に反対し、平和を追求しようとするシュタウディングーの姿勢は、先見的で、まさしく時代を先取りするものであったと評価することができよう。

こうしたシュタウディングーの主張は平和主義に強く貫かれているだけであって、それ以上のものでなく、先の論文とは異なって、彼の祖国ドイツとの直接のかかわりを示唆するものは含まれていない。シュタウディングーが年長の友人であるフリッツ・ハーバーにこの論文を送ったのは、彼が有毒ガスの開発と戦闘におけるその使用にかかわったことを知っており、そのうえで彼と討論したいと考えたからである。ところが、この論文をシュタウディングーから送られて対話を求められたハーバーの驚きと怒りにはただならぬものがあつた。この論文をめぐって戦わされたシュタウディングーとハーバーとの間の論争については、ジョン・コーンウェル著『ヒトラーの科学者たち—科学、戦争、悪魔の契約』の叙述が参考になる。

ハーバーは、彼よりも一世代若いシュタウディングーが「最大の欠乏と無力の時期に、背後からドイツを襲う」ような発言をしていることを非難しながら、連合国にたいしてはいっそう懲罰的な手段を推進するしかないという宣伝文句を書き送ってきたのである。ハーバーの返答の趣旨は、愛国者というものは外国が祖国に加えた中傷と戦うことに集中すべきであつて、これとは反対にこの中傷をかえって激しくするような利敵行為に加担すべきではないということであつた。こうした返答にシュタウディングーは当然のことながらひどく驚いた。ハーバーはシュタウディングーが書いた論文の趣旨を素直に受け取ろうとはせずに、彼のつい最近の戦時

中の言動にまで遡ってこれを問題とし、しかもシュタウディンガーの言動を七首伝説とほとんど同一視したうえで論陣を張ったからである。

このハーバーの返答に対してシュタウディンガーは、彼が自分の論文の意図を理解してくれていないことを大いに遺憾としながら、自分の主たる関心はドイツを非難することにあるのではなく、化学のなかで具体的なかたちをとった科学の前進が戦争に深刻で悪い影響を与えることを警告することにあるのだと反論した。ハーバーは、シュタウディンガーのこの反論に答えてさらに、彼が述べているようなそうした倫理的な考慮というのは科学者の仕事というよりは政治的・軍事的な権威がする仕事だと述べて、毒ガスの使用を禁ずる国際協定に反対する姿勢を公然と示した。つまり、倫理的な事柄やモラルというのは、基本的に個人どうしの問題であって、国家間の問題ではないというのである。ハーバーはある機会に、毒ガス兵器がそのほかの兵器よりも残酷だという証拠は存在せず、毒ガス兵器の使用にたいする国際的な非難は非論理的であると公言したことがあるだけでなく、こうした兵器の開発と使用とがむしろ戦争の人道化につながると述べたことがあるくらいである⁽²⁴⁾。こうしたハーバーの考え方に対してシュタウディンガーはさらに反論して、もしも将来の戦争がハーバーの言うとおりに進み続けるならば、結局のところ、地球と人類の全面的な破壊に行き着くだろうと警告した⁽²⁵⁾。

ドイツの愛国主義者や右翼的な革命に賛同する者たちがシュタウディンガーの平和主義的で人道的な姿勢をどう見ていたかは、シュタウディンガーにたいしてハーバーがとったこうした態度と姿勢に端的に象徴されているといえよう。高名な化学者であるハーバーが彼の論文の趣旨を正しく踏まえずに、彼の政治的姿勢を「七首伝説」と同一視したことは、長期にわたってシュタウディンガーにたいする誤解と中傷をふりまく結果となった。なお、ハーバーがユダヤ人であったことは特筆しておくべきであろう。愛国者ハーバーは、化学の分野で大きな世界的な業績を残し、これほどまでに愛国主義的な姿勢を貫徹しただけでなく、ヴェルサイユ協定による多額の賠償金の返済にあえぐドイツを救おうとして、例えば海水中から金を採取する計画を立案・実行して失敗に終わったことさえあるのだが、祖国ドイツにたいするこうした功績にもかかわらず、彼はナチスによる政権掌握の後、1933年4月に施行された「公務員職再建法」に抗議して、カイザー・ヴィルヘルム協会研究所を辞職してドイツを去り、ケンブリッジ大学に招かれてイギリスに亡命したことを付記しておかなければならない⁽²⁶⁾。

(3) シュタウディンガーのフライブルク大学招聘にさいして生じた事件

第三の出来事は、すでに述べたように、1925年にシュタウディンガーがフライブルク大学に招聘されようとしたさいに生じた事件である。

当時、1921年からフライブルク大学の化学教授の座を占めていたのは、すでに有機化学と生化学の分野で世界的な業績をあげていたハインリヒ・オットー・ヴィーラント Heinrich Otto

Wieland (1877-1957) であった。ヴィーラントは、天然有機化学の研究に取り組み、1912年からは胆汁酸やアルカロイドの研究を行い、各種の胆汁酸がステロイド物質であることを発見したり、その構造を研究するなどの世界的な業績をあげていた。さらに彼は、生体細胞の酸化過程の研究にも取り組んで、これが脱水素のプロセスであることを突き止めてもいる。後にヴィーラントはこれらの功績によってノーベル化学賞を受賞することになった。そのヴィーラントがミュンヘン大学に在職していたリヒャルト・ヴィルシュテッターの後任として1925年に同大学に招聘されて、その化学の教授が空位となったのである。

フライブルク大学では、ヴィーラントの後任人事をめぐって後任教授の招聘のための委員会が組織され、候補者の人選が行われた。まず最初にミュンヘン工科大学の有機化学教授のハンス・フィッシャーが第一候補者にあげられたが、彼との間で何回かの折衝が行われた後に、ミュンヘンを離れたくないという本人の意向が確認されて、この話は立ち消えとなった。次に候補者としてあげられたのがシュタウディンガーであった。しかし、彼には大きな難点があった。すでに述べたような彼の第一次世界大戦中と戦後の言動が改めてフライブルク大学数学・自然科学部の教授たちの疑念を呼び起こし、彼らが第一次大戦中にスイス国籍を取得しようとした彼の政治姿勢をいぶかる声をあげたばかりか、シュタウディンガーのふたつの論文、すなわちすでに述べた1917年の「技術と戦争」論文と1919年の戦争と毒ガスにかんするフランス語論文とを問題にしたのである。

こうした事情のために、クラウス・プリースナーによれば、後任人事を審議した委員会の議長であった植物学者のF. オルトマンスは、1925年7月25日、学内の懸念や躊躇を代表するかたちでシュタウディンガーに手紙を書き、フライブルク大学招聘に応ずる意志があるかどうかを彼に確かめた後に、もし招聘に応ずる意志があるならば、第一次世界大戦中の彼の政治姿勢とドイツにたいする彼の現在の考え方を説明してほしいと求めた。彼はシュタウディンガー宛の手紙でこう書いている。「私たちは、政治的な問題と学問の問題とを結びつけたくはありませんが、今回、あなたがドイツにたいして現在とっている姿勢にかんして明確なイメージを得ようと務めなければなりません。というのは、学部と評議会ですらに審議するさいに、こうした趣旨の質問を受けることは避けられないからです。そして、私たちが所見を依頼しているさまざまな専門分野の同僚たちが、あなたの諸論文、とりわけガス戦争の諸論文のために、そしてあなたが戦争期間中にスイス市民となられたために、躊躇する声をあげているからです。」⁽²⁷⁾

こうしてシュタウディンガーは、オルトマンスのこうした求めに応じて、彼の政治的立場を説明しなければならなかった。彼は、同年9月にニュルンベルクで開催されたドイツ化学者協会の総会に出席して生ゴムの分子構造にかんする報告をしたのだが、その帰り道にフライブルク大学に立ち寄って招聘委員や学部構成員たちと話をし、またオルトマンスの前でも再び詳しい報告をして、彼らの疑いはらす努力を行った。シュタウディンガーはこのドイツ化学者協

会の総会で大御所ヴィーラントともいろいろと話をしたらしく、後にヴィーラント宛の手紙のなかでこう書いている。「私は、あなたやそのほかの方々と話をすることができて、とても嬉しく思っています。というのも一連の誤解があって、それは時代を支配した興奮のためにまったく無理からぬものなのですが、こうしたことを私が知っているからです。だから私は、枢密顧問官のオルトマンズ氏にもう一度詳しい報告をする機会を喜んでもちましたが、それは、招聘の用件とはまったく別に、この機会にはっきりとさせるためだったのです。毒ガス戦争にかんする私の立場が誤解されたので、ジュネーヴの赤十字に掲載された、化学戦争の意味にかんする報告の一部をお手元に差し上げてあなたにご覧いただきたいと思います。」⁽²⁸⁾

この手紙から、シュタウディングガーがようやくの思いで、フライブルク大学の近い将来の同僚たちによるこれまでの誤解を解くことに成功したことがわかる。なお、彼がこの手紙のなかで言及している「ジュネーヴの赤十字に掲載された、化学戦争の意味にかんする報告」とは、おそらくはこの手紙を書く直前に発行された『赤十字インターナショナル・レビュー』の9月号に掲載された、彼の二度目のフランス語の論文「報告・化学戦争にかんする技術」のことであり、この論文の手稿の一部が手紙とともにヴィーラントに送られたのだと推測される。シュタウディングガーがこの論文を書いたのは、フライブルクへの招聘の話があったことを意識してのことであろう。この二度目のフランス語論文は、先の論文「現代技術と戦争」とほぼ同一の内容をさらに詳細に展開したものであり、この論文もまた、彼の思惑通り、フライブルク大学の招聘選考委員たちの誤解を解くのに役立ったであろう。この論文では、先のフランス語論文とは異なって、毒ガスの使用にきびしく反対するという彼の初期の姿勢は表面には出ていない⁽²⁹⁾。しかし、それととも、彼が置かれていた状況を考えると、止むをえない、最小限の譲歩だったと言うことができよう。

さて、この年の11月28日に、オルトマンズはシュタウディングガーに宛てて後任人事の決定を知らせる手紙を書いている。それによれば、招聘委員会は併せて4名の候補者のうち、シュタウディングガーを第一位の候補として二度投票を行い、彼を後任の正教授として招聘することを決定したが、そのさいに、学部ではごく少数の同僚が彼にたいする懸念を表明しただけで、大多数が提案に賛成し、そのために大学評議会では何の反対も起きなかったという。こうして幾多の困難を乗り越えて、シュタウディングガーは同年12月4日にフライブルク大学への就職を正式に決めたのであった⁽³⁰⁾。

第4章 「シュテルンハイム作戦」の顛末

ここで本稿の主題である第四の出来事、すなわち「シュテルンハイム作戦」についてやや詳しく考察しよう。

すでに述べたように、1933年9月29日、シュタウディングガーにかんするハイデガーの密告を

受けたバーデン州高等教育審議官フューアレは、早くもその明くる日にフライブルク警察にシュタウディングガーを告訴した。公務員職再建法第4条にもとづく告訴は遅くとも9月30日を期限とするようにと定められていたからである。これを受けてただちにカールスルーエの秘密国家警察（ゲシュタポ）が動き出し、ゲシュタポによる内密の捜査が開始された。オットが確認した文書によれば、10月4日にゲシュタポはこの一件でバーデン州の文部省に報告を行い、シュタウディングガーにたいする内密の捜査を「シュテルンハイム」という暗号名で呼ぶことを通告している。このゲシュタポの捜査は、スイス時代のシュタウディングガーの言動と国籍取得申請の実際の経過などを調査・確認する必要があるために、ドイツの外務省に働きかけて、外務省からスイスのベルンにあるドイツ大使館に宛てて記録文書を送るようにと圧力がかけられた。これを承けて同年のクリスマスに、当時のドイツ公使のヴァイツゼッカー男爵がシュタウディングガーにかんする書類をゲシュタポに手渡している。チューリヒのドイツ総領事館にも同様に記録文書の提示が求められた⁽³¹⁾。

ゲシュタポはこうして集めた書類にもとづいて分厚い捜査文書を作り上げ、明くる年の1934年1月25日には捜査を終了した。そして、カールスルーエの本庁は、これらの関係書類を文部省宛に送付して、これらの文書の内容は「当手続き [つまり、シュテルンハイム作戦] の実行に十分であると思われます」との結論を書き送った。つまりシュタウディングガーは、ゲシュタポによるおよそ4カ月の捜査の後に、有罪と宣告されたのである。そして、早くも同年2月6日にはこの有罪宣告を承けて、バーデン州文部省は学長ハイデガーに記録文書を送り、公務員職再建法が3月31日までに執行される必要があることを理由に、迅速な回答を求めたのであった⁽³²⁾。

この時期はハイデガー学長にとってはまさしく苦難の時期であった。私がすでに論じたように、前年10月に「指導者＝学長」となってフライブルク大学の実権を掌握したハイデガーは、「指導者原理」にしたがって、「ナチズムの国家の諸力と要求」にもとづいて大学改革を行おうとしたにもかかわらず、そのナチ突撃隊的な強硬路線とラディカリズムのゆえに大学内で大きな摩擦を引き起こし、孤立を深めていた。また彼は、ナチとハイデガーの熱烈な崇拝者であり、自らの腹心でもあった31歳の刑法学者エーリク・ヴォルフを法学・国家学部長に任命したが、ヴォルフは軍事教練科目を法学部の必修科目のなかに強引に組み込もうとして同僚から非難を受けたばかりか、ナチ学生の圧力に押されてアドルフ・ランペの正教授代講を打ち切りとするなど、文部省が苦情処理に乗り出さざるをえないような学内状況を作り出していた。さらに、1934年1月下旬から2月上旬にかけて、カトリックの学生組合であった「リプアリア」がハイデガーと親しかったフライブルク学生団指導者フォン・ツア・ミューレンによって解散させられた直後に、さらに上級のナチ学生団指導者オスカー・シュテーベルがこれを撤回して、フォン・ツア・ミューレンを罷免するという騒動が持ち上がり、ハイデガーの大学内での孤立とナチ内部での醜い争いに追い打ちをかけた。これらのことがやがて4月のハイデガー学長辞任へ

とつながっていくのである⁽³²⁾。

ハイデガーが文部省から記録文書の送付を受けて回答を求められたのは、ハイデガーがシュターベル宛にフォン・ツァ・ミューレンの罷免を撤回するように求める手紙を書いたその日のことであった。こうした多忙ななかで、ハイデガーはその4日後の2月10日に文部省に自らの学長見解を発送している。

オットが検証したハイデガーのこの報告書は、シュタウディングガーの問題点を以下の諸点にまとめたものであった。最初にあげられているのは、シュタウディングガーが染料にかんする化学的な製造過程の機密を敵国に漏洩したことがドイツ総領事館で問題となったことである。第二の問題点はシュタウディングガーが第一次世界大戦末期に祖国ドイツが最大の危機にさらされた時期にスイスの市民権を得ようと申請したことである。第三は、同総領事館の報告で、シュタウディングガーが「ドイツの民族的な潮流にたいする真っ向から反対していることを決して隠さず、また繰り返し、武器やそのほかの労働奉仕によって自らの祖国を支援することは決してしないと宣言していた」こと、そして彼が1917年に、軍旗への誓いを行うことを拒否した、平和主義者で医学博士のニコライのために嘆願書を書いたことである。ハイデガーはとりわけ第三の報告を重大視している。

そしてハイデガーの報告書は次の結論で結ばれていた。「これらの事実からして公務員職再建法第4条の適用が要求される。これらの事実、1925-26年にシュタウディングガーのフライブルク招聘が検討されてからドイツの広い地域で知られたし、それ以来周知のことであり続けているので、フライブルク大学の名声を考えても介入を必要とする。シュタウディングガーが今日では民族的な高揚の110パーセントの友であると偽称していることを見ればなおのことである。年金付きの退職よりも罷免が問題とされてしかるべきであろう。ハイル・ヒトラー。」⁽³³⁾

ここでわれわれが見過ぐすことができないのは、シュタウディングガーの機密漏洩にかんする疑惑についてはチューリヒの総領事館でも問題とされはしたが、明確な証拠をあげることができず、したがってたんなる噂として扱わざるをえなかったものであるのに、ハイデガーがシュタウディングガー罷免の第一の理由にこれをあげていることである。つまり、ハイデガーは他人の密告という重大な事件を自ら主導しておきながら、その証拠がたんなる噂にもとづくものであって、事実にもとづくものでは決してなかったということになる。証明されていない事柄を事実だと信じて行動することは、一大学の学長としてはあまりにも軽率にすぎるであろうし、このことを可能にした精神構造が、哲学者および人間として、問題とされても抗弁しえないであろう。たとえシュタウディングガーの言動を問題にするとしても、現在のそれならいざ知らず、この時点ですでに13-14年が経過した、そんなにも昔の、いわば時効となっていて、しかもシュタウディングガーがフライブルクに招聘されるにさいしてすでに解決済みの問題を有罪として蒸し返していることも理解しがたい行動である。そして、「年金付きの退職」よりも「罷免」というきわめて厳しい判決をハイデガー自らが下していることも、平和主義的な言動に対するハ

ハイデガーの敵対的な姿勢を明確に示している。ハイデガーがシュタウディングガーにたいして求めている処分がいかに厳しく冷酷なものであるかは、後にハイデガーがドイツ敗北後にナチ関与のゆえに受けなければならなかった処分と比較すれば、一目瞭然である。つまり、ハイデガーは大学当局から「罷免」または「解職」ではなくて、教育活動の無期限禁止、大学内職務の停止、そして翌年末を期限とする給与打ち切りを通達されたのであって、研究のみを行うことのできる教授としては大学にとどまることができたのである。これは明らかに恩情的な措置であって、この措置と対比して見れば、シュタウディングガーに対するハイデガーの冷酷さと陰湿さは際立っていると言わなければならない。

学長ハイデガーのこの提言を受けて、バーデン州文部省は2月17日に電話でシュタウディングガーを呼び出して査問することになった。当然のことながら、こうした呼び出しも査問も彼にとっては晴天の霹靂であった。おまけに彼は、ハイデガーが自分をナチ当局とゲシュタポに密告したことを、この時点でもまた生涯にわたっても、知るよしもなかった。告発されたシュタウディングガーは、このときわめて厳しい危機的状況に陥り、彼の人生で最大の重大な岐路に立たされた。彼自身の証言によれば、この時、先に述べたフェーアレを含むナチの役人たちが教職を辞するようにと彼に迫ったという。第二次世界大戦後の1945年5月フライブルクを統治していた占領軍は非ナチ化と戦争犯罪捜査の活動の一環として大学人にアンケート調査を行ったのだが、幸いなことに、これにたいするシュタウディングガーの回答の写しが残っている。そのなかで彼はこの時のことをこう書いている。「……私はカールスルーエの文部省から呼び出しを受けた。そして、新しい党役員（フェーアレ教授、グリュニング博士、フーバー博士）が口頭で私に、世界大戦中のスイスでの私の行動を理由として、私に職を辞するようにと通告した。……私の辞職にたいする書面による理由付けは、当時もその後も私の手元には一切届けられなかった。私にはこれに対抗してフライブルクの私の職を守り通そうという確固とした目論見があった。私は当時まさしく、高分子化学という新しく開拓された分野で私の仕事を中断することはできなかったし、とりわけ、私の研究所を建設するという長年にわたる仕事を、党役員にこの地位を委ねることで投げ出してしまうとは思ひもしなかったからである。この建設のために私は多額の個人的資金（8万マルク）を投入していたのである。」⁽³⁴⁾

だからこそシュタウディングガーは、彼に思いつくかぎりの手段を用いて、ナチと戦わざるをえなかった。彼はこう証言している。「私は、この査問のさいに、学者としての私の国際的な名声、例えばちょうど受けたばかりの、ローマにあるレアール・アカデミカ・デイ・リンチェイのカンニツァッロ賞の授与のことを引き合いに出したし、さらに次のようなことも指示した。私が解職されたとすれば、そのことは、長年ドイツ帝国ラトヴィア公使を務めた私の義父、オスカー・ヴォイト医学博士をつうじて、ヒンデンプルク大統領の知るところとなるだろうし、そのさいには、ベルリンにいる私の義父の活動にかんする帝国大統領の承認通告書が本省の党代表者には特別な印象をあたえることになる、と。」⁽³⁵⁾つまり、シュタウディングガーは、自分

の妻マグダの父親であるヴォイトを後ろ盾にすることで、自らを防衛しようとしたのである。彼のこうした戦法は、後になって一定の範囲内でそれなりの効果を発揮したであろう。なお、シュタウディングーはこの時、オスカー・ヴォイトの娘であり、生物学を巨大分子の観点から研究していたマグダと再婚していた。彼女はシュタウディングーの研究上の最大・最良の伴侶でもあった。

もちろんシュタウディングーは、この尋問にさいして、第一次世界大戦の時の自らの言動をまったく否認することはできず、この点では一方的な防戦を強いられることになった。オットが確認した文書によれば、シュタウディングーが次のような釈明を余儀なくされたことがナチ側の尋問記録に書き記されているという。自分はキューカー教徒や良心的兵役拒否者のように厳密な意味で平和主義者だったわけではない、戦争にたいする自分の考えは技術がもつ意味を考察することから来ているそれ以外ではない、かなり前から自分の政治的見解は以前とは異なっており、フライブルクで活動を開始してからの自分には「非国民的心術」という非難はもはや当たらない、これとは反対に自分はナチスによる国民的な革命の開闢 *Ausbruch* を大いに喜んで歓迎している、そのうえ自分には現在は国民社会主義的国家のなかで特別に射程の広い活動を行う可能性がある、と⁽³⁶⁾。さらに彼は、経済的な自給自足をめざす新しいドイツの事態にたいして自分に化学の専門家としてどんな貢献ができるかについて、意見を開陳さえたのであった。

さて2月22日、バーデン州文部大臣オットー・ヴァッカーは、学長ハイデガーの所見とシュタウディングーにたいする査問の結果にもとづいて、国務省にたいして次のような申請を行った。「国務省は、ドイツ帝国地方長官 [ローベルト・ヴァーグナー—筆者] にたいして以下の提議をされるよう、要望いたします。それは、決定の開始の日付をもって、教授シュタウディングー博士をバーデン州国家公務員から罷免することです。」「これらの事実 [シュタウディングーの戦時中と戦後の非ドイツ的言動を指す—筆者] にもとづけば、シュタウディングー教授はドイツ的大学の青年のための教育者としてはもはや考慮に値しません。私は、公務員職再建法第4条にてらして、フライブルク大学からの免職の前提条件が与えられたものと判断いたします。」⁽³⁷⁾ この文書には上記の尋問の記録が付されていた。

ところが、シュタウディングーを教職から解雇するために、国務省から帝国地方長官ローベルト・ヴァーグナーにたいして提議すべくアクションを起こすようにと求めたこの申請は、どういう訳か、国務省からは却下されたのである。その理由の詳細については今のところよく分かってはいない。しかし、やがて、フライブルク市長のフランツ・ケルバーも、おそらくこの噂を聞いて、仲介に乗り出し始めた。こうしてナチ内部でも世論が少しずつ変化し始めた。つまり、国際的にも化学者として名声を得ているシュタウディングーを仮に「罷免」にしたとすれば、国際的に激しい非難を浴びる可能性が大いにあることをも考慮する必要がある、その場合、最も厳しい処分である「罷免」ではなくて、「恩給付きの休職処分」にすることで手を打

つのが妥当ではないか、とささやかれ始めたのである。

折しも、2月25日付けでデュッセルドルフの『フェルキッシュ・ツァイトウング』紙がシュタウディンガーの論説「ドイツ国民にとっての化学の意義」を掲載した。シュタウディンガーは、この論説を書いた時期を考えると、まったく思いがけず自分に降りかかった災難をあらかじめ予想してこの論説を書いたわけではなかったが、しかしこの論説の内容は、現在の彼の政治的姿勢が以前のそれとは異なっていることをある程度証明するものとして、人生最大の危機にさらされた彼の立場をいくらかは有利にするのに役立ったであろう。

この論説は、民族の生存可能性が領土の大きさと気候条件という二つの要因に大きく左右されることから出発して、気候条件に優れず、領土が狭く、第一次世界大戦後は植民地を喪失したドイツ民族の生存可能性は、もっぱら技術によって新しいさまざまな可能性を開くかどうかにかかっていると論じている。彼によれば、農業経営と産業、技術者と化学者と産業家が手をたずさえ、技術革新の飛躍的向上をはかることがドイツにとっての生命線となる。彼は例えばこう述べている。「こうした状況にさいして、ドイツ民族が自らを維持するためには、ただふたつの道が開かれているだけである。将来は、慎重な世話をすることによって自らの土地からできるだけ沢山の生産物が取り出されなければならない。さらに、輸入を抑制することが追求されなくてはならない。」⁽³⁸⁾

ドイツはこれまで食料品、鉱石、繊維、鉱油、生ゴムなどを輸入に頼ってきたが、これらは今では次第にドイツの土着の素材から生産されるようになってきている。これも技術と化学の発展のおかげである。こうした技術をさらに推進して自給自足の経済に接近しなければならない。例えば、ドイツは戦前には人絹産業では世界で第一位であったが、今はアメリカ、イギリス、日本によって追い抜かれているので、この分野でもさらなる上乘せが必要である。そのためにはよく訓練された化学者や技術者が必要であるが、しかし、ドイツの多くの大学研究所は、かなり以前に作られたものなので、現在必要とされる化学者や技術者の養成のためにふさわしいとはいえなくなっている。こうした状況を改善して優秀な化学者・技術者を育成することが必要である。とりわけ重要な分野は石炭産業である。高く効率よいエネルギーの供給源である石炭は、これからさらに有用なさまざまな化学物質を抽出できるという利点をもち、ドイツ民族の生存可能性にかんして特別に重要な要素となっている。したがって、今後はこの分野の技術的発展が急務である。シュタウディンガーは概略このように論じている。

この論説は、シュタウディンガーのかつての姿勢の変化を示している。彼はかつて人類の平和という観点から化学がもっている潜在的能力の脅威を悲観的に見ていたが、ここではそのような政治的観点からではなく、化学に内在しながら、現実の場面でのその有効性を吟味し、化学とその応用の結果である技術の成果を肯定的な側面から見ている。やはり、化学とその成果もまた両刃の刃なのであって、それは誤った目的のために適用されると大きな害を及ぼすが、現実の生活の改善のために適用されれば人類社会に役立つ力となる。彼は、第一次世界大戦中

とその直後には前者の側面から化学を見ていたが、この論説では後者の側面から化学を論じているのである。こうした姿勢の変化は、彼がドイツのフライブルク大学に着任した後、チューリヒよりもはるかに劣悪な労働条件を改善して、高分子研究のために独自の現代的な研究所を作ろうとして懸命に仕事をしていた彼の当時の状況をも反映している。彼は後に、自らの現在の立場を示すために、この論説をバーデン州文部大臣に送っている。この論説に示された彼の考え方は、やがてナチが提起する自給自足経済のスローガンに一部適合しうる要素をそなえていた。しかし、そうかといって彼はナチスに決して迎合しているわけではないということは強調しておく必要がある。

ともあれシュタウディングーを取り巻く状況は若干の変化を見せ始めた。当初は彼にたいして罷免という厳しい処分を要請していたハイデガーも、次第にナチ内部のこうした世論の変化を無視することができなくなった。こうした変化を考慮して、ハイデガーは3月5日、バーデン州文部大臣宛にこう書き送らざるをえなかった。「よく考えれば、私には以下のことが得策であると思われます。それは、St. [シュテルンハイム、すなわちシュタウディングーの暗号名] の場合にも、問題となっている本人が外国で学問的に評価を受けている立場を考慮して、ふさわしい方策を探すことです。…申すまでもなく、事柄においては当然ながら何の変更もありえません。政治以外の新しい重荷が生ずる可能性を回避することだけが問題です。」⁽³⁹⁾

この手紙の中の「事柄においては当然ながら何の変更もありえません」という文面は、シュタウディングーが事実関係からすれば完全に有罪であり、本来は「罷免」処分が相当であるという事態に何ら変化はないということにハイデガーがきわめて強い執着を抱いていることを示している。ハイデガーとしては、大学学長としてこの作戦を主導した以上、これを引っ込めることは沽券にかかわる。しかし、この国際的にも著名な化学者に対してそのような処分がなされた場合、外国から重大なクレームがつけられる恐れがある。というよりも、不本意ながら、そういうような口実を用いるならば、「罷免」または「解職」にするのではなくて、年金支給付きの「退職」処分ということで妥協してもよろしい。ハイデガーはそのような意味合いで妥協策を余儀なくされたと考えられる。これらの情勢を総合すると、どうやらバーデン州文部省も国務省も例えば染料にかんする機密漏洩などというような流言蜚語によってはシュタウディングーを処分に追い込むことはできないと考えざるをえなくなったのに対して、ハイデガーはゲシュタポとともに、あくまでもシュタウディングーが「罷免」に値するということを本気で信じていたといえる。これはどう見ても異常な事態であると言わざるをえないであろう。

しかし、事態がわずかに好転し、最悪の処分を免れたとはいっても、実際にシュタウディングーが受けた判決は彼自身にとっては屈辱的なものであった。すでに述べたように、文部省からこの件にかんする申請を受けた国務省は、この件が証拠不十分だったのか、それともシュタウディングーの義父ボイトがヒンデンプルク大統領と懇意の間柄であることを考慮したのか定かではないが、ともかくもこれを却下した。そこでバーデン州文部省は、国務省のこうした意

向を受けて、3月14日にシュタウディングーをもう一度電話で呼び出して、彼自身から教職からの「辞職願い」を提出させるという措置をとることで、自らの面目とプライドを保とうとした。苦境に陥った文部省は、おのれの面目を失わず、かつまたシュタウディングーの完全な勝利には導かないために、巧みな解決策を考え出さざるをえなくなったのである。

われわれはここでシュタウディングー自身の証言を聴くことにしよう。

「さらに数回の査問の後に、私は、本省で書式を定められた謝罪の文書と辞職の申請書に署名しなければならなかった。そのさいに私はこう通告された。この辞職申請書は、私の行動が適切なものであった場合には撤回されることになっている、と。この文書の写しは私には渡されなかった。だから私は、党にたいするいくらかの金銭的な寄付を、クリスマス募金というかたちで引き受けなければならず、ナチ親衛隊にたいしても後援会員という名目で分担金を引き受けなければならなかった。私は、こうした出来事全体について、免職という脅しのもとに、沈黙を守る義務を負わせられた。だから、私以外には妻と義父のオスカー・ヴォイト博士（目下のところ、アッシュのシュロース・クルークスロイトにいる）のほかには誰もこのことについて知らなかった。この用件での後の正式文書については、私は前と同じように知らないままであったが、メッツ教授がこれを所有していた。彼は、彼が1937/38年に学長職を務めた間、党は私を免職しようと繰り返し試みたのだが、[かつての学長ハイデガーとは大きく異なって一筆者]私をかばってくれた。」⁽⁴⁰⁾

つまり、シュタウディングーは自発的に「辞職」願いを提出するようにと文部省当局から迫られ、やむなくその申請書を提出した。しかし、これはたんに形式的な措置であって、当局の文書に記録されはしたが、シュタウディングーがもしも新たに政治的に好ましくないことを引き起こした場合にのみ辞職命令が発効するが、彼の行動が適切なものであれば撤回されるという条件付きでのものがあった。したがって、シュタウディングーはナチの監視下に置かれ、完全な沈黙を強いられるという状況の中で、いわば刑の執行を猶予されたわけである。しかし、シュタウディングーがこうした条件を突き付けられて自ら不利な行動を起こすはずもなかった。彼には自らの研究所を整備するという大きな課題があったし、彼の化学の研究も、彼の先の論説が示すように、ナチの自給自足経済の推進にそれなりに適合する側面をもっていたからである。それからおよそ6ヵ月後の1934年10月6日、シュタウディングーは、こうした条件を守ったので、「辞職」申請を取り下げたことを認められた⁽⁴¹⁾。

こうしてシュタウディングー事件には完全な決着が付けられることになった。つまり、「シュテルンハイム作戦」はハイデガーとゲシュタポの完全な失敗に終わったのである。それは、ハイデガーとゲシュタポの当初の意図を完全に裏切ったかたちで、言い換えれば、密告者であり仕掛け人にほかならない学長ハイデガーの完全な敗北をもって終了した。しかしそれは、確実な証拠に依拠せず、たんなる憶測にもとづいて発動されたために、一人の無実の人間を6ヵ月の長きにわたって責めさいなんなのであって、たとえ世間に知られることがなかったとしても、

その反道徳的な意味は限りなく大きいと言わなければならない。そして、それはこうした密告事件を主導した者の道義的な責任と、こうした行動をなした本人の精神構造がいかなるものであったのかという本質的な問いをわれわれに提起している。

第5章 「シュテルンハイム作戦」後の諸事件

シュタウディングアーの先の証言にもあるように、「シュテルンハイム作戦」の失敗の後にも、彼に対する政治的圧迫は続いた。

プリースナーによれば、シュタウディングアーは、フライブルク大学で高分子化学研究を推進するために、1937年6月15日、ベルリンのカイザー・ヴィルヘルム協会の枠組みのなかで高分子化学研究所を設立しようとして請願書を書き、「科学、教育、民族形成のための帝国およびプロイセン大臣」[以下、便宜的に帝国・プロイセン文部大臣と称する一筆者] ベルンハルト・ルスト宛に提出した。この嘆願書は、高分子研究を推進することによって、ドイツ国内で不足している物資に代わる代用物質を生産できる可能性が大いにあることを強調し、例えばコールタールから薬品や染料を作ることができるし、木綿、綿、生ゴム、ベンジン、グリースなど、ドイツがもっぱら輸入に頼っている物質を人工物質で代用して、輸入にかかる費用を軽減することができるという経済的利点を力説している⁽⁴²⁾。その論調は、明らかに、シュタウディングアーの先の論説「ドイツ民族にとっての化学の意義」の延長線上にある。

しかし、この請願書は半年後の1938年1月14日に、ルストによって却下された。その理由は、この請願書に盛り込まれた計画が、カイザー・ヴィルヘルム研究所を個人的・場所的な関係からフライブルク大学の「しかるべき」研究所と混合させるものであって好ましくなく、またシュタウディングアーがアウトラインを描いた諸課題は、ハイデルベルク大学のフロイデンベルクの研究所やダルムシュタットのブレヒトの研究所でも引き継ぐことができるというものであった。しかし、プリースナーは、高分子研究にかんしてはフライブルクには「しかるべき」研究所は存在しないし、ルストが名をあげたフロイデンベルクやブレヒトも高分子研究の研究者としてふさわしい条件をそなえてはおらず、それがシュタウディングアーだけにしかできない仕事であることから見て、この件もシュタウディングアーに対するルストとナチ国家組織の疑惑と不信の念にもとづく政治的圧迫であると見なしている⁽⁴³⁾。

帝国・プロイセン文部大臣ベルンハルト・ルストは、シュタウディングアーにたいして不信をもち、厳しい評価を行っていた点で、ハイデガーのそれと共通するものがあった。実はそれもそのはずであった。周知のように、ルストとハイデガーは昵懇の間柄であったからである。ルストはハイデガーを特別に評価していて、両者には特に親密な関係があった。ルストは1933年9月に、まだフライブルク学長職にあったハイデガーをベルリン大学の哲学部教授に招聘しようとして手を差し伸べたことがあるだけではなくて、1935年5月に学長職を投げ出したハイデ

ガーをフライブルク大学哲学部長に任命するようにと、当時のフライブルク大学学長に働きかけて、大学側から強い反発を受けたりなどした経緯がある⁽⁴⁴⁾。そのほかにもさまざまな場面で、ルストはハイデガーにたいして特別な援助の手を差し伸べたことがあった。例えば、ルストは2度までもハイデガーをベルリン大学に招聘しようとしたし、第二次世界大戦末期の1944年という極端な物資窮乏の時代に、帝国・プロイセン文部省がハイデガーの著作の出版のためにヴィットリオ・クロスターマン社にたいして必要な印刷用紙を無条件で用意したことさえあるくらいである。ハイデガーは、同じナチ党の内部でも、イデオロギー担当のアルフレート・ローゼンベルクからは一定の批判と監視を受けていたが、帝国・プロイセン文部省および文部大臣とはきわめて良好な関係にあったことを忘れてはならない⁽⁴⁵⁾。

シュタウディングーにたいするナチの政治的迫害はその後にもさらに執拗に続いた。その主要なものは、外国での学会に出席したり、外国に招かれて講演を行ったりするさいの外国出張の制限または禁止措置であった。

シュタウディングーは、1937年2月以前に、外国での学会出席や講演のための外国出張の許可を得るべく、申請をナチ当局に提出していた。しかし、これらは繰り返し拒否された。このことを端的に象徴しているのが、1937年2月5日に帝国・プロイセン文部大臣ルストがシュタウディングーに対して「外国出張の禁止」措置を通告したことである。当然ながらシュタウディングーはこの措置にたいして抗議したばかりか、これに屈することなく、同年ローマで開催された第10回国際化学会議に参加しようとし、さらに1938年にもラトヴィアのリガ大学からの招待に応じて出張しようとして、許可を申請した。これに対してルストが1938年11月2日に最終的に下した決定は次のようなものであった。「私は、フライブルク大学化学実験室長であるヘルマン・シュタウディングー教授・博士の科学上の外国旅行の許可にたいしては、今後これを保留するものである。私はシュタウディングー教授に然るべき仕方次第で次のことを知らせるよう求める。私には、シュタウディングー教授の政治的過去に鑑みて、彼が科学上の活動を外国で行うことは当分の間はまだ望ましくはないと思われる、と。」[傍点は筆者]⁽⁴⁶⁾ ナチ当局はやはりきわめて執念深く、シュタウディングーの政治的過去を忘れてはいなかったのである。

これに対してシュタウディングーは、自分の外国出張にたいする制限は、ドイツを敵視するプロパガンダを利用することになるとして、抗議した。彼は、バーデン文部省参事官のバウアーに会ったり、長い手紙を書くなどして、自分が推進する高分子研究が「四ヵ年計画」に象徴されるドイツの自給自足経済と産業増進に大いに役立つこと、自分が外国での会議に出席できなければ、高分子にかんする誤った理解が流布したり、公平な学問的議論が継続できなくなると、結局は外国を利用することになることなどを力説して、反撃に努めた。

1940年1月、彼の戦いが一定の功を奏して、彼にフライブルク大学からの罷免を提起した当人であるオットー・ヴァッカーがシュタウディングーに有利になるようにとルストにとりなすなどの動きが生まれた。ヴァッカーはルスト宛の手紙で、フライブルク大学の地区指導者から

の報告では、この地区指導者がシュタウディングーの文句のつけようのない態度を考慮して、最近になってシュタウディングーが一定の範囲で政治的に従事していることを認めたこと、そして彼が近いうちに何人かの政治的指導者の前で最初の講演をすることになっていることを伝えた後で、こう書いている。「したがって、地区指導者はシュタウディングー事件の決着が最終的につけられたと見なしています。私はこうした事実をお伝えすることで、同時に次のような理解を主張してよいと考えます。シュタウディングー教授の科学上の外国での活動に対しては、将来的には根本的な仕方では疑念をもつことは、もはやふさわしくないと見なされるべきだ、と。」⁽⁴⁷⁾シュタウディングーは、バーデン州という地区のレベルでは、長い苦難と圧迫の後に、ようやくにしてナチの信用をある程度勝ち取ることができた。その背景には、シュタウディングーが、フライブルク産業および商業会議所会長エミール・チューリンの協力によって、高分子化学研究所の基礎を築いて、着々と成果をあげつつあったという事情もあったであろう。しかし、ルストとナチ当局は、シュタウディングーの政治的姿勢の評価にかんしては、依然として疑念を捨ててはいなかったと考えられる。

外国出張にかんしてハイデガーの方はどうであったかといえば、彼はシュタウディングーとはまったく対照的に、1935年から翌年にかけてスイスのチューリヒに旅行しているし、1936年にはウィーン旅行をし、そしてローマのドイツ・イタリア研究所から招かれてヘルダーリン講演を行うためにイタリアに旅行している。この時彼は亡命したカール・レーヴィットと最後の邂逅をし、レーヴィットと会っている間中も胸からナチの党章バッジをはずすことがなかったことはよく知られている⁽⁴⁸⁾。ハイデガーのこれらの旅行はすべて、ナチ当局から許可されていたものであった。この事実も、ハイデガーとルストとの昵懇の間柄を示す好例である。ハイデガーは彼の弁明書「1933/34年の学長職。事実と思想」のなかで、ナチ当局から国際会議への出席などを妨害されたと述べているが、これはまったくの虚偽にはかならない⁽⁴⁹⁾。

第6章 その後のシュタウディングーとハイデガー

ハイデガーにとっては、シュタウディングーにかんする事件はこれで完全に終わったわけではなかった。これには重要な後日談がある。

ハイデガーは学長職の挫折の後にもナチスという「勃興」にたいする確信・期待・忠誠心という点ではいかなる変化もなかったが、その後ナチスという政党自体が大きな振動と変化を体験することになった。周知のように、ハイデガーが学長職から撤退しておよそ2ヵ月後の6月30日に、ナチの中でヒトラーに次ぐナンバー2の地位にあった突撃隊長エルンスト・レームほか多数の突撃隊幹部がいっせいにヒトラー派によって殺害・逮捕され(「長いナイフの夜」事件)、ナチの政治路線が民衆主義的・行動的・社会主義的要素を失って、国家独占資本または大企業との妥協と協調の方向へと決定的に進むことになった。このことは当然ながら、ナチが自らの

内部で政治路線と思想の対立を含み込みながら進んでいかざるをえないことを意味し、それゆえにナチ外部にたいする弾圧と独裁はもちろん、同じナチ内部でも多数派または実権派が少数派または批判勢力の思想と行動をたえず監視するというような事態が生ずることになった。つまり、ナチの内部での思想闘争が激化し始めたのである。こうした事情はハイデガーを取り巻く状況にも完全にあてはまる。

ハイデガーは1934年7月以降、すでにフランクフルト大学の教授に昇格していたばかりか同大学学長を経験さえていたエルンスト・クリークが編集・発行していた雑誌『生成する民族』から、「その極めつけの無神論と形而上学的ニヒリズム」のゆえに非難と攻撃を受けるようになり、クリーク自身からも批判されるようになる⁽⁵⁰⁾。さらに、ナチのイデオロギー局を牛耳っていたアルフレート・ローゼンベルクも1936年になってから、その難解さと生物学的人種主義の希薄さのゆえに、ハイデガーと彼の哲学を警戒のまなざしで見ようになる。

ところでナチは、1936年9月のニュルンベルクにおける党大会で、いわゆる「四カ年計画」を発表し、四年以内にドイツ経済を復興・成長させて産業的自立を達成することを決定した。この「四カ年計画」とは、ドイツが敵国に包囲されていることを踏まえ、食料および燃料を初めとする外国品を買い控えるとともに、産業振興政策によって国内生産を飛躍的に増大させて、自給自足の経済（アウトアルキー）の完成を目標とするものであった。この計画は、ダムやアウトバーンなどを建設する公共事業計画や各種の産業増進政策によって失業者を労働力として急速に吸収していく一方では、やがてドイツ経済と国民を来るべき全面戦争へと向けた総動員の体制へと駆り立てる方向に突き進んでいくことになる。一定の監視下に置かれていたシュタウディンガーはどうかと言えば、彼はこうした状況の変化のもとで、自らの高分子研究を科学的に深化させるというもっぱら純粋に学問的な姿勢で活動してはいたが、その研究の面からしても、政治的にはさまざまな意味で自らを「四カ年計画」に適応させることができたのである。

さて、1938年6月10日、バーデン州のナチの機関紙『アレマン人』に、われわれから見ればきわめて興味深いふたつの記事が掲載された。この『アレマン人』は、言うまでもなくかつてはハイデガーの学長就任を賛美し、彼に好意的な記事を書き、彼の講演を掲載し、彼の代弁者でもあった機関紙である。このふたつの記事のうち、最初の記事はハイデガーがその少し前に行った「形而上学による近代世界像の基礎づけ」というタイトルの講演にかんする論評であった。この論評の内容は、「ハイデガー教授は、誰も彼を理解しないという事実のために名声を得ているにすぎず、無を教えている」が、現在はハイデガーの哲学のように、言葉の弄びをするのではなくて、科学的な実践の仕事である「四カ年計画」を推進することの方がはるかに重要なのだという、ハイデガーにたいする悪意に満ちたものであった。つまり、ハイデガーの哲学的名声は、誰も彼の哲学を理解しないところから来ているにすぎず、しかもニヒリズムという無を、すなわち無用の空虚な哲学理論を教えているにすぎない、というのである。ここで言

う無とは明らかに、ハイデガーの哲学の中心的な主張であるニヒリズムとダブらせられている。これは期せずして卓抜なブラックジョークとなっていると言うべきであろう。

もうひとつは「四ヵ年計画と化学」と題する次の記事であった。「来る6月15日12時15分、大学週間の取り組みのなかで、アルバート通り21番地の化学研究所の新しく建てられた施設の引き渡しが行われる。この催しには、フライブルク大学学長、商工会議所長、そして化学研究に関心をもつ多くの人々が出席する予定である。これに引き続いて、H.シュタウディンガー教授が『四ヵ年計画と化学』にかんする講演を行う予定である。」⁽⁵¹⁾つまり、ハイデガーの講演にたいする論評のすぐ下に、シュタウディンガーによる「四ヵ年計画と化学」の講演の記事が掲載されていたのである。これを見て当のハイデガーはびっくり仰天したに違いない。それというのも、彼がそこに、かつて密告という手段に訴えて追い落とそうと画策したあのシュタウディンガーの名前を見いだしたからだけではない。『アレマン人』が、今やハイデガーを賛美するどころか、彼の講演に侮辱的な論評を加え、さらにそのうえに、これらのふたつの記事を対照させて掲載したそのやり方もまたハイデガーを憤慨させたであろうからである。

ハイデガーにたいする評価が否定的であるのに反して、シュタウディンガーにたいする『アレマン人』の評価は明らかに肯定的である。つまり、ハイデガーがかつて大学から葬り去ろうとしたシュタウディンガーが、ハイデガーがまったく予想もしないかたちで『アレマン人』に登場しただけでなく、かつてはハイデガーを褒めあげた『アレマン人』が今では、彼が「言葉をもて遊び」、「誰も理解しないという事実のために名声を得ている」と彼を酷評したうえで、化学者シュタウディンガーを四ヵ年計画に積極的にかかわっているという理由で持ち上げたのである。かつてハイデガーが密告という陰險な手段に訴えながら休職処分にさえも追い込むことができなかったシュタウディンガーが、今や四ヵ年計画とのかかわりでナチの期待を集め、ハイデガーに代わって時代の寵児となっているとは、何という皮肉なことであったであろうか⁽⁵²⁾。

これにかんしてはハイデガー自身の証言を聴こう。周知のように、第二次世界大戦後、フライブルク大学の政治的浄化委員会はハイデガーをナチ関与の問題で喚問し、彼はきわめて困難な立場に立たされた。教職のみならず、住居や蔵書を没収されかねないという危機的状況のなかで、ハイデガーは1945年12月15日付けで政治的浄化委員会議長のコンスタンティン・フォン・ディーツェ宛に最後の弁明の手紙を書いた。彼はそのなかで、今問題としている『アレマン人』の中傷記事に言及して、こう述べている。「私は1935年以来繰り返し[ナチに]警告してきたし、1938年の夏には講演『形而上学による近代世界像の基礎づけ』のなかでこう表明しました。もろもろの学問がますます技術に自らを売り渡している、と。[ナチ]党はこの非難をきわめて正確に理解しました。ある日、『アレマン人』にこの講演にかんする悪意ある報告が掲載されました。その末尾にはこういうメモがありました。今はもうそんな哲学的な言葉の遊びをするひまはないのであって、四ヵ年計画のための科学の実践的な仕事の方が肝要なのだ、

と。新聞の学芸欄は、『興味深い講演の夕べ』についての報告に続いて、次のような注意書きが書かれるというようにレイアウトされていました。その注意書きとは、現在フライブルクでは化学協会が審議を行っていて、大学が四ヵ年計画のためのこうした仕事に従事しているというものでした。『ハイデガー教授は、誰も彼を理解しないという事実のために名声を得ているにすぎず、無を（すなわち、ニヒリズムを想定して）教えている』とされ、私の講演は、専門科学のもっぱら『生活にとって重要な』仕事に対比して、誹謗されたのです。⁽⁵³⁾

つまりハイデガーはディーツェに、ナチの機関紙である『アレマン人』が自分の哲学を侮辱し、自分の哲学と対比させて「四ヵ年計画」を持ち上げたことを示すことで、自分がナチによって攻撃の対象となっていたという印象を与え、そうすることで自分がナチの協力者ではなかったように見せかけようと考えたのである。

しかし、化学協会にかんするハイデガーの記憶は部分的に正しいが、部分的に誤っている。「化学協会が審議を行っていて、大学が四ヵ年計画のためのこうした仕事に従事している」というハイデガーの叙述は正確ではない。実際には、新しい化学研究所の引き渡し式が行われ、それに引き続いてシュタウディングガーによる「四ヵ年計画と化学」の講演があったのである。ハイデガーにとってもっとも重大であったのは、ハイデガーを誹謗する記事の下にシュタウディングガーによるこの講演の記事があるというように紙面がレイアウトされていたことの政治的な意味である。オットが述べているように、これはおそらくハイデガーにのみ分かるような仕方である含意を隠していた⁽⁵⁴⁾。その含意は、ハイデガーにとってはおそらく三重の意味で、このうえなく屈辱的であったに違いない。

それは、かつて自らの代弁者であった『アレマン人』が今や自分を攻撃する側に回ったことだけでなく、ハイデガーとシュタウディングガーにたいするナチの評価が時代の進展とともに完全に逆転し、バーデン州のナチとの関係においては、哲学者と「形而上学」とが完全に敗北して、化学者と「技術」が完全に勝利したからである。そして、ハイデガーにたいする評価と、彼がかつて密告という卑劣な手段によって追い落とそうとした相手にたいする評価とが、今や完全に逆転してしまったからである。新たな「四ヵ年計画」という目標のもとに、産業増進による自給自足と戦時経済に突き進み始めようとしていた当時のナチの状況下にあっては、学問を技術の奴隷から解放し、新たな形而上学によって近代世界像を基礎づけ直そうと意図していたハイデガーの哲学は、まったく必要とされず、その意味においてナチに完全に置き去りにされたのである。

しかしハイデガーは、『アレマン人』の記事の件でおそらく胸がかきむしられるほどの屈辱を思い出しながらも、ディーツェにたいしてはシュタウディングガーの名前を決してあげるわけにはいかなかったであろう。もしも彼がシュタウディングガーにかんする密告事件の首謀者であり、「シュテルンハイム作戦」への加担者であることが露見すれば、彼に対する処分はもっともっとと厳しいものであったであろうし、教職への復帰も決してありえなかったであろうことは、明

白だからである。そしてハイデガーは、『アレマン人』が自分を侮辱したことを自分とナチとの対立の証拠としてすりかえながら、そして思わずシュタウディングーの名を口にしたくなる自分の気持ちに気づいて、おそらくはこれを必死でおさえながら、まったくすれすれのところで、無実の仮面をまんまと被り通したのである。

第7章 主題の考察

シュタウディングーに対するハイデガーの密告事件は、世界的名声をもつ哲学者ハイデガーのどのような相貌と精神構造とを示しているであろうか。

このシュタウディングー事件にたいする歴史の封印を解いて、その全貌を初めて明らかにしたフーゴ・オットは、記録文書の調査によって、この事件がハイデガーの主導による典型的な密告事件であったことが疑う余地のないことに愕然としたのであった。しかし、それ以上に彼を困惑させたのは、この密告事件の真の動機にかんする説明ができないということであった。1933年4月に公務員職再建法が施行されてから半年の間の政治的激変の時期に、ドイツの大学では、ユダヤ系教授の免職のためだけではなくて、おそらくは思想的・政治的に見て公務員として問題ありとされた教職のポストをめぐる醜い争いのためにも、匿名の中傷や告発がさかに行われたと言われるが、シュタウディングー事件の場合は、現職の大学の学長が同僚にたいする密告を主導したという点で、やはり異様な様相を呈していると言わざるをえない。

オットはこの事件を、きわめて優れた地球物理学者でありフライブルク大学正規外教授であったヨハン・ゲオルク・ケーニヒスベルガーが、同僚のヴィルヘルム・ハマー教授によって、「マルクス主義的な過去」があったことを理由に告発された事件と比較している。学長ハイデガーは1934年1月16日に、つまりシュタウディングー事件が進行していたさなかに、バーデン州にこの告発にかんする回答書を提出し、ケーニヒスベルガーが今は政治活動に携わってはならず学問研究に専念していること、そして数学・物理学研究所にある装置のほとんどが彼の私物であり、彼の退職は大学にとってマイナスに作用することを考慮して、彼には何の処分も行うべきではないと述べたのである。オットは、同じような性質をもち、ハイデガーが学長としてともにかかわったこれらの二つの事件を対比して、「シュタウディングー事件における〔ハイデガーの〕無条件で頑なな固執はそのほかにおそらく個人的な動機からも説明されなければならない」⁽⁵⁵⁾と推測している。

しかし、オットが言うように、たとえハイデガーによるシュタウディングーの密告が「個人的な動機」によるとしたところで、そこにいかなる「個人的な動機」があったのかを問われるとたちまち返答に窮することになる。それは、シュタウディングーに対するハイデガーの「嫉妬」であったかも知れないし、「反感」または「憎悪」であったかも知れない。そのほかにも、シュタウディングーが退職した後の空位のポストをめぐる利害関係などがあったかも知れな

い。たとえハイデガーの動機を「個人的」と見るにせよ、この問題については、これ以上の新しい記録文書や証言が見いだされない限り、今のところ不明とせざるをえない。

しかし、はっきりしているのは、ハイデガーが学長としての権限を利用して、何ら罪のない同僚の15年から16年も昔の言動にかんする問題を、しかもフライブルク大学ではその後に完全に決着済みとなった問題を蒸し返して、あの悪名高いゲシュタポに密告したことであり、腹心の部下に秘密裏の事前調査を命じたとはいえ、たんなる噂の域を出ない不確かな情報にもとづき、およそ8ヵ月の長きにわたって良心的で平和主義的な、しかも世界的な評価を受けていた一人の化学者を責めさいなんだということである。しかし、とりわけ不可解なのは、ハイデガーが例えば染料にかんする軍事的機密の漏洩という理由のない濡れ衣をその告発理由の第一に掲げて、証拠が存在せず証明もされないたんなる噂を真実と信じ込んで、確信的に行動しているという点である。これは無論、真実を愛し求める哲学者の行動では決してないと断ぜざるをえない。

そしてハイデガーの目には、永世中立国スイスに在住していたシュタウディングガーが政治的に中立の立場に立ちたいという自らの信念にもとづいて1917年1月というドイツの存亡を賭けた危機的時期にスイス国籍を取得しようとしたことは、祖国への裏切りを意味する言語中断の行為であると映じていたのだから、ハイデガーのこうした見方は、排外主義・愛国主義的なナショナリストまたはショーヴィニストの所業で、根拠のない噂にもとづいていたがゆえにそのうえ狂信的と言われても反論しえないであろう。

これにはさらにハイデガーの次のような政治信念が結びついている。彼は例えば、1936/37年の「ニーチェ講義」のなかで、ニーチェの言葉に依拠し、これに賛意を表しながら、「ヨーロッパは、まだいつまでも民主主義にしがみつki、これがヨーロッパの歴史的死滅になるであろうことを見ようとししない」⁽⁵⁶⁾と述べたし、1942年のヘルダーリン講義でも「もし人が現下ギリシャ精神を解釈して、ギリシャ人がすべてすでに『国民社会主義者』でもあったかのように思うるとすれば、人は国民社会主義がもつ歴史的無類性を認識し評価するのに何の貢献をもなしていないわけである」⁽⁵⁷⁾と論じている。さらに彼は、1943年の「ニーチェの言葉『神は死んだ』」のなかでも、「ニーチェが目を見離さない公正さについての了解を準備するためには、キリスト教的、ヒューマニズム的、啓蒙思想的、ブルジョア的、社会主義的な道徳に由来する公正さは、ことごとく排除しなければならない」⁽⁵⁸⁾と書いてさえいた。したがって、ハイデガーの反ヒューマニズム的、反民主主義的、反社会主義的または反共主義的なこれらの政治信念はすべて、明らかに、ヒトラーに代表されるナチズムの世界観とそのまみりつたりと重なり合うものである。ナチズムの世界観でここに示されたハイデガーの政治信念に存在しないものと言え、露骨な人種的・反ユダヤ的な言辞だけであろう。

いわゆる「あいぐち伝説」にかんして言えば、ヒトラーは『我が闘争』のなかで繰り返しこう述べてはいなかったであろうか。「ドイツは勝つはずがなかった。勝利がもはやドイツの国

旗にくっつきそうな最後の瞬間に、一撃でドイツの春期攻勢を萌芽のうちにつみとり、勝利を不可能にするために最もふさわしいと思われる手段がとられた。軍需工場のストライキが組織されたのである。ストライキが成功したならば、ドイツの前線は崩壊せねばならなかった。」⁽⁵⁹⁾

「途方もない犠牲と窮乏は誰のためだ。兵士は勝利のために戦うべきだ。それに対して本国ではストライキとは！」⁽⁶⁰⁾「みじめな墮落した犯罪者よ！わたしがこの時、この途方もない事件を明確にしようとすればするほど、ますます憤激と不名誉の恥辱が額に燃えあがった。」⁽⁶¹⁾

ヒトラーのようなこうした狂信的ともいえる政治信念からすれば、シュタウディングガーは敵と戦うドイツ兵士の背後でストライキを執行したわけではないが、この時期に平和主義的な言動を行い、ドイツ国籍をもちながらスイス国籍を取得しようとしたから、彼はドイツ民族を裏切る革命主義者と何ら変わるところはなく、「七首伝説」のなかに同化される人物の一人とされるのは理の当然ということになる。まさしくハイデガーは、このようなヒトラーとまったく同一の政治信念と路線のもとに行動したのであって、「七首伝説」を事実として本気で強く確信し、これとの関係においてシュタウディングガーをこれに重ね合わせて、彼を反民族的な人物として大学から追放しようと画策したのである。したがって、われわれはこの事件をつうじて、ハイデガーが、心情から見ても思想と行動から見ても、正真正銘の、確信をもったナチとして行動していたことを明瞭に理解することができる。この事件にかんするハイデガーの言動は、彼の著作や講義のなかでの政治的発言と同様に、きわめて素朴でナイーブなものであり、その素朴さとナイーブさのゆえに、ハイデガーはシュタウディングガーを密告することができたのだとも言えるかも知れない。私には、この事件がハイデガーの「個人的な動機」に由来するというよりも、政治的には単純で素朴な信念の持ち主であったハイデガーが、「七首伝説」に象徴されるような、ごく普通のナチ党員と共有していた素朴な思想と行動に由来すると言っていいような気がしてならないのである。

いずれにしても、ハイデガーがナチの権力を利用して、密告というかたちで一人の化学者を調べあげて、有罪および免職の危機にさらしたことは、ハイデガーがナチの権力犯罪の一翼を担うどころか、これを主導したことをはっきりと示している。このことは、ハイデガーの伝記のなかに明確に記述されなければならない事実であり、この事件を除外して彼の政治的伝記を語ることはもはや許されはしないであろう。そしてもし、哲学者の思想と行動または生き様が切っても切れない深い関係にあるのだとすれば、ハイデガーの哲学理論もまた、彼の生き様と政治的行動、そしてシュタウディングガー事件を主導しえたことに象徴される、彼の人格と精神の内奥に秘められた暗部とのかかわりにおいて、解釈されなければならないであろう。

[2007年1月14日記]

注

- (1) 奥谷浩一「ハイデガー『事実と思想』の真実と虚構－ハイデガーの弁明再論－」、『札幌学院大学人文学会紀要』第71号（2002年3月）を参照されたい。
- (2) 奥谷浩一「ハイデガーとシュタウディング事件」、『札幌唯物論』第50号（2005年12月）を参照されたい。
- (3) Vgl. Hugo Ott, Martin Heidegger. Unterwegs zu seiner Biographie, Campus Verlag, S. 201ff.
- (4) シュタルクおよびレーナルトとナチスとの関係、そして「ドイツ的またはアーリア的物理学」の末路にかんする詳細は、例えばMark Walker, Une physique nazie?, Sous la direction de Josiane Olff-Nathan, La science sous Le Troisième Reich, Éditions du Seuil, 1993, p. 101.
- (5) Ott, *ibid.*, S. 205. オット, 同上書, 323頁。なおオットは、外務省政治文書課に保管されている記録文書を自ら調査することによって、これらの諸事実を突き止めたのである。
- (6) シュタウディング『研究回顧－高分子化学への道』（小林義郎訳）岩波書店 [1966年], 115頁。
- (7) 『ノーベル賞受賞者辞典』を参照のこと。シュタウディングの学問上の経歴については、上記の『研究回顧－高分子化学への道』の、特に「序文」に詳しい。シュタウディングは、たんに「高分子化学の巨人」であっただけではなくて、実際に巨大な体躯をもつ大男であった。
- (8) Staudinger, Technik und Krieg, Die Friedeswarte. Blätter für zwischenstaatliche Organisation, 19, 1917, S. 199. またClaus Priesner, Hermann Staudinger und die makromolekulare Chemie in Freiburg. Dokumente zur Hochschulpolitik 1925-1955, Chemie in unserer Zeit, 21. Jg. 1987, S. 151も参照されたい。
- (9) Staudinger, Technik und Krieg, *ibid.*, S. 200.
- (10) *Ibid.*, S. 202. なお、シュタウディングのこの論文は地球資源の枯渇の諸問題を論じており、この分野の先駆的な業績に数えられるであろう。
- (11) Ott, *ibid.*, S. 205. オット, 同上書, 318頁。なお、この総領事館の所見は、クラウス・プリースナーの上記論文にも引用されている。Vgl. Claus Priesner, *ibid.*, S. 154.
- (12) Vgl. Markus Mattmüller, Leonhard Ragaz und der religiöse Sozialismus, Band 1, EVS-Verlag Zürich, 1968, S. 245.
- (13) 上記のマットミュラーの著書の第1巻と第2巻に、ラーガツと彼の宗教的社会主義の活動の軌跡がまとめられている。
- (14) Markus Mattmüller, *ibid.*, Band1, S.234.
- (15) 上記のマットミュラーの第2巻目のさまざまな箇所を参照されたい。Mattmüller, *ibid.*, Band2, S. 306, 318, 168, 186, 416.
- (16) Ott, *ibid.*, S. 205.
- (17) Staudinger, Technik und Krieg, *ibid.*, S. 197.
- (18) Claus Priesner, *ibid.*, S. 154.
- (19) *Ibid.*, S. 157.
- (20) Staudinger, La technique moderne et la guerre, Revue International de la Croix Rouge, 1919, p. 508.
- (21) *Ibid.*, p. 514-515.
- (22) *Ibid.*, p. 515.
- (23) *Ibid.*, p. 515.
- (24) John Cornwell, Hitler's Scientists. Science, War and the Devil's Pact, Viking/Penguin, 2003, P. 62.
- (25) *Ibid.*, p. 68.
- (26) ハーバーの生涯については、Margit Szöllösi-Janze, Fritz Haber 1868-1934, Eine Biographie, Verlag C.H.Beck München, 1998を参照のこと。ハーバーは、その愛国心、化学上の数々の業績、それによるドイツへの貢献にもかかわらず、ユダヤ人であるがゆえに、1933年の「公務員職再建法」の施行の後にドイツを去らなければならなかった。この時、物理学者マックス・プランクが総統ヒトラーのもとを訪れて、ハーバーのようなユダヤ人科学者の解雇はドイツの科学者を重大な危機に陥れると述べて、何とかハーバーを引き留めようとした。しかし、これに対してヒトラーは、それならドイツは科学なしで数年間はやっていくのだ、と述べたという。ナチ体制のもとで、20名のノーベル賞受賞者とドイツの科学者全体のおよそ20%がドイツを離れたといわれる。その代償はヒトラーにとってきわめて高くつくことになった。Josiane

- Olf-Nathan, Introduction, Sous la direction de Josiane Olf-Nathan, La science sous Le Troisième Reich, Éditions du Seul, 1993, p. 10-11.
- (27) F. Oltmanns an Staudinger Brief vom 25. juli 1925 (Priesner, *ibid.*, S. 151) .
- (28) Staudinger an Heinrich Wieland Brief vom 14. September 1925 (Priesner, *ibid.*, S. 153) .
- (29) Vgl. Staudinger, Rapport technique sur la guerre chimique, Revue International de la Croix Rouge, 1925, p. 694-722.
- (30) Priesner, *ibid.*, S. 154.
- (31) Ott, *ibid.*, S. 202-203.
- (32) 奥谷浩一「ハイデガー『事実と思想』の真実と虚構—ハイデガーの弁明再論—」,『札幌学院大学人文学会紀要』第71号, 36-41頁を参照のこと。
- (33) Heidegger an badisches Kulturministerium. Brief vom 10. Februar 1934 (Priesner, *ibid.*, S. 154) .
- (34) Priesner, *ibid.*, S. 157.
- (35) Ott, *ibid.*, S. 207.
- (36) Ott, *ibid.*, S. 206.
- (37) Ott, *ibid.*, S. 206.
- (38) Staudinger, Die Bedeutung der Chemie für das deutsche Volk, Völkische Zeitung, an Sonntag, 25. Februar, 1934.
- (39) Ott, *ibid.*, S. 208. Priesner, *ibid.*, S. 154.
- (40) Priesner, *ibid.*, S. 157.
- (41) Ott, *ibid.*, S. 206.
- (42) Priesner, *ibid.*, S. 157.
- (43) *Ibid.*, S. 155.
- (44) 奥谷浩一「ハイデガー『事実と思想』の真実と虚構—ハイデガーの弁明再論—」,『札幌学院大学人文学会紀要』第71号, 同上論文, 45頁以下を参照のこと。
- (45) 奥谷浩一, 同上論文, 45頁を参照のこと。
- (46) Priesner, *ibid.*, S. 155.
- (47) *Ibid.*, S. 156.
- (48) Karl Löwith, Mein Leben in Deutschland vor und nach 1933, J. B. Metzler, S. 57.
- (49) 奥谷浩一「ハイデガー『事実と思想』の真実と虚構—ハイデガーの弁明再論—」,『札幌学院大学人文学会紀要』第71号, 49頁以下を参照のこと。
- (50) Vgl. Schneeberger, Nachlese zu Heidegger, Bern, S. 223-230.
- (51) Ott, *ibid.*, S. 327.
- (52) このようにシュタウディングーは、自らを守るためにナチに迎合するポーズをとることを余儀なくされたことがあったし、あるいは自らの高分子化学の研究を可能な限り進展させることがナチの「四ヵ年計画」の方向または利害と部分的に一致することがあった。しかし、だからといって彼は決して自らの思想を変えてナチに転向したというわけで決していない。このことは、ドイツ敗北後に進駐してきたフランス占領軍当局のシュタウディングーにかんする評価によっても証明することができる。これについても、Claus Priesner, *ibid.*, S. 156を参照されたい。
- (53) Schreiben Heideggers an den Vorsitzenden des politischen Bereinigungsausschusses v. Dietze an 15. Dezember, 1945. Vgl. Bernd Martin (Hg.), Martin Heidegger und das "Dritte Reich", Wissenschaftliche Buchgesellschaft, S. 207.
- (54) Ott, *ibid.*, S. 206.
- (55) Ott, *ibid.*, S. 213.
- (56) Heidegger, Nietzsche: Der Wille zur Macht als Kunst, Gesamtausgabe, Band 43, S. 193.
- (57) Heidegger, Hölderlins Hymne "Der Ister", Gesamtausgabe, Band 53, S.106.
- (58) Heidegger, Holzwege, Gesamtausgabe, Band 5, S.246-247.
- (59) Adolf Hitler, Mein Kampf, Zentralverlag der NSDAP, 1939, S. 213.

(60) Ibid., S. 214.

(61) Ibid., S. 224-225.

Heidegger and "Operation Sternheim"

OKUYA, Koichi

Abstract

It is well known that Martin Heidegger was the president of the University of Freiburg from 1933 to 1934. However, it is less known that as a member of the Nazi Party (National-Socialist German Workers Party), he was active in Nazifying the university for nearly one year. In recent years, it has been revealed that Heidegger was more actively involved in the Nazi Party than had been thought. These revelations came from research by Victor Farias and Hugo Ott. A university president, Heidegger was involved in various Nazi-related incidents, some of them involving remarkable betrayals. One was the betrayal of the world-famous chemist Hermann Staudinger, a case called "Operation Sternheim" by the Gestapo secret police. That operation was lost to history for many years, until the Ott study. This paper clarifies the historical truth of Operation Sternheim (the Staudinger case) and uncovers the dark side of the thought and character of Heidegger, who played a pivotal role in that case.

Keywords: Gleichschaltung, Führer=Rektor, Dolchstoßlegende, Giftgaskrieg, Patriotismus und Treue zum Volk

(おくや こういち 本学人文学部教授 哲学・倫理学専攻)